

万葉の紫の発想

— 恋衣の系譜 —

1 はじめに

1 紫の恋情発想の解明

本論のねらい 『万葉集』には、「紫」を詠み込む歌が一七首ある。そして、その「紫」の歌は、すべて恋情発想をとっている。本論では、この紫の歌がなぜ恋情発想をとっているかを考える。すなわち、紫の歌に恋情発想が伴うべき社会的な約束・基盤として、恋する男女が相逢うときに紫の「恋衣」を身に纏う習俗があったことを解き明かし、その基盤から紫の歌にみられるような恋情表現が獲得された経緯を解き明かす。

なお、論題は『万葉集』に限定しているものの、事と次第によつては平安時代初期・中期の作品にも及ぶ。

2 用例

一七首 『万葉集』の一七首の紫の歌は、次のとおりである。以下の万葉歌の引用は、小学館『万葉集一〜四』による。

畠 山 篤

- ① あかねさす 天皇、蒲生野に遊獵する時に、額田王の作る歌
紫野行き 標野行き 野守は見ずや 君が袖振る

(二一20、雑歌)

皇太子の答ふる御歌 明日香宮に天の下治めたまふ天皇、謠を天武天皇といふ

- ② 紫の にはへる妹を 憎くあらば 人妻ゆゑに 我恋ひめやも

(二一21、雑歌)

紀に曰く、「天皇の七年丁卯の夏五月五日、蒲生野に縦獵す。時に、大皇弟・諸王・内臣また群臣、皆悉従ふ」といふ。

- ③ 託馬野に 生ふる紫草 衣に染め いまだ着ずして 色に出でにけり
笠女郎、大伴宿禰家持に贈る歌三首(うち一首)

(三一395、譬喩歌)

太宰帥大伴卿、大納言に任せられ、京に入らむとする時に、府の官人ら、卿を筑前国の蘆城の駅家に餞する歌四首(うち一首)

④韓人の 衣染むといふ 紫の 心に染みて 思ほゆるかも

(四一五69、相聞、大典麻田連陽春)

⑤紫の 糸をそ我が繕る あしひきの 山橋を 貫かむと思ひて

(七一1340、譬喩歌、草に寄する)

⑥紫の 名高の浦の 砂地 袖のみ触れて 寝ずかなりなむ

(七一1392、譬喩歌、浦の沙に寄する)

⑦紫の 名高の浦の なりその 磯になびかむ 時待つ我を

(七一1396、譬喩歌、藻に寄する)

⑧紫草の 根延ふ横野の 春野には 君をかけつつ うぐひす鳴くも

(十一1825、春の雑歌、鳥を詠む)

⑨紫の 名高の浦の なびき藻の 心は妹に 寄りにしものを

(十一2780、物に寄せて思ひを陳ぶる)

⑩紫の 帯の結びも 解きも見ず もとなや妹に 恋ひ渡りなむ

(十一2974、物に寄せて思ひを陳ぶる)

⑪紫の 我が下紐の 色に出でず 恋ひかも瘦せむ 逢ふよしをなみ

(十一2976、物に寄せて思ひを陳ぶる)

⑫紫の まだらの縷 花やかに 今日見し人に 後恋ひむかも

(十一2993、物に寄せて思ひを陳ぶる)

⑬紫草を 草と別く別く 伏す鹿の 野は異にして 心は同じ

(十一3099、物に寄せて思ひを陳ぶる)

⑭紫は 灰さすものそ 海石榴市の 八十の衢に 逢へる児や誰

(十二3101、問答歌)

⑮紫草は 根をかも終ふる 人の児の うらがなしけを 寝を終へなくに

(十四3500、相聞)

昔老翁あり、号を竹取の翁といふ。この翁季春の月に、丘に登り遠く望す。忽ちに羹を煮る九箇の女子に値ひぬ。百の嬌は儼なく、花の容は匹なし。ここに娘子等、老翁を呼び囁ひて曰く、「叔父来れ、この燭火を吹け」といふ。ここに翁唯々といひて、漸く趣き徐に行き、座の上に着接きぬ。良久にして、娘子等皆共に笑みを含み、相推譲りて曰く、「阿誰かこの翁を呼びつる」といふ。すなはち、竹取の翁謝まりて曰く、「非慮る外に、偶に神仙に逢ひぬ。迷惑ふ心、敢へて禁むる所なし。近づき狎れる罪は、希はくは贖ふに歌を以てせむ」といふ。即ち作る歌一首 併せて短歌

⑯みどり子の 若子髪には たらちし 母に懐かえ 襦袢の 平生髪には 木綿肩衣 純裏に縫ひ着 頸付の 童髪には 結ひ幡の 袖付け衣 着し我を にほひよる 児らがよちには 蛭の腸 か黒し髪を ま櫛もち こにかき垂れ 取り束ね 上げても巻きみ 解き乱り 童になしき 色なつかしき 紫の 大綾の衣 住吉の 遠里小野の ま榛もち にほしし衣に 高麗錦 紐に縫ひ付け 刺部重部 なみ重ね着て 打麻やし 麻統の子ら あり衣の 宝の子らが うつたへは

綜て織る布 日ざらしの 麻手作りを 信巾裳成者之寸丹取為
 支屋所経 稲置娘子が 妻問ふと 我におこせし 彼方の
 二綾裏沓 飛ぶ鳥の 明日香壮士が 長雨忌み 縫ひし黒沓
 刺し履きて 庭にたたずめ 罷りな立ちと 禁め娘子が ほの
 聞きて 我におこせし 水縹の 絹の帯を 引き帯なす 韓帯
 に取らせ 海神の 殿の薨に 飛び翔る すがるのごとき
 腰細に 取り飾らひ まそ鏡 取り並め掛けて 己が顔 かへ
 らひ見つつ 春さりて 野辺を 巡れば おもしろみ 我を思へ
 か さ野つ鳥 来鳴き翔らふ 秋さりて 山辺を行けば なつ
 かしと 我を思へか 天雲も 行きたなびく かへり立ち 道
 を来れば うちひさす 宮女 さすたけの 舍人壮士も 忍ぶ
 らひ かへらひ見つつ 誰が子そとや 思はえてある 如是所
 為故為 古 ささきし我や はしきやし 今日やも児らに い
 さにとや 思はえてある 如是所為故為 古の 賢しき人も
 後の世の 鑑にせむと 老人を 送りし車 持ち帰りけり
 持ち帰りけり

(十六ー3791、有由縁并せて雑歌)

①⑦紫の 粉濁の海に 潜く鳥 玉潜き出ば 我が玉にせむ
 右の歌一首 (十六ー3870)

二 大衆的な恋情表現

1 恋情を伴う紫

恋情発想 紫の歌は、すべて恋情を伴っている。
 紫の歌で、部立や詞書きあるいは歌の内容から見て、一見して恋歌

と知られる用例は、一三例(①・②・③・⑤・⑥・⑦・⑨・⑩・⑪・
 ⑫・⑬・⑭・⑮)である。

そして残り四首を見るに、これらも恋と分ちがたい繋がりがある。
 ④は麻田連陽春の作で、上司の大伴旅人に対する惜別の歌である。こ
 の歌は相聞の部立に入っており(この場合は男性間の相聞)、この歌の
 詠まれた事情を伏せて読むと、紛う方なく恋の歌である。この歌は、
 染衣に託して恋を述べる在来の恋歌の伝統に負っている。

⑧は春の雑歌に分類されているものの、第四句の「君を懸けつつ」
 には恋情が籠められている。

⑯は、国見における野遊び(歌垣)の行事を下地にした竹取の翁の
 古伝説が、中国風に翻案されて仙女に逢う話に化したものである。こ
 の長歌は、翁の恋する青年期を描写する時に服飾を詳述している。す
 なわち、青年期の竹取の翁は、「紫の大綾の衣」をはじめ種々な服飾
 (八種類)を纏い、「娘子」たちに妻訪いしている。このように、この妻
 訪いの段は恋の現場を活写している。

①⑦は作因が編者にも知られていなかったらしく、「右の歌一首」と
 だけ注されている。この歌には、属目の自然を詠んだにすぎないとす
 る説と、相聞の譬喩歌とみる説がある。筆者は相聞の譬喩歌とみる説
 が適切だ、と考える。なぜなら、作因の未詳な歌はこの歌に続いて五
 首あって、それらはすべて恋歌であり、また「玉」を女性に譬える類例
 が多数あるからである。

以上、紫を詠み込んだ一七首すべてが、恋情を伴っている。

2 原初的物象的な紫

伊原昭説 次に、紫の歌における紫のあり方をみる。このことにつ
 いては、既に伊原昭「万葉集の紫とその背景」(一九六五、一四四頁)

が次のように指摘している。「紫が植物の生態のまま、あるいは、色彩以前の、紫色がうまれるに至る過程の姿で、万葉に表現されている場合が多く、まだ色名としても、染色の段階を出す、普遍的に一般の物象の色彩を示すために使われる概念的な色名にも、さらに、色彩そのものでなく、それから生ずる他の意味内容を象徴する抽象的な色名にも至っていない。すなわち、色彩の世界からみれば原初的な姿をもっていた」。

この説をもう少し詳しく述べる。(1)「紫草」として詠まれている例が、①・②蒲生野の紫草、③託馬野の紫草、⑧横野の紫草、⑮東国の紫草、⑬鹿が「草と別く別く伏す」紫草の六例ある。また、⑤紫が「草に寄する」に分類され、また用字が②・⑬では「紫草」とあるように、紫草という植物との関連が意識されている。

(2) 染めに関する事柄については⑫「紫の斑の縵」、染色の材料となる生地については⑯「紫の大綾の衣」の例があるだけである。

(3) 色相の種類を示す例については、⑰「紫の粉濁の海」が一例あり、「紫」と「濃」の関係を予想させるものの、古代においては色に直接結びついた「濃」の用例が他にないので、色相の種類を示す例がないというべきである。

(4) 紫で表現された物象については、③・④・⑯の「衣」、⑤の「糸」、⑩の「帯」、⑪の「下紐」、⑫の「縵」の七例がある。そして、その他の植物や鉱物などの色を形容する紫の例は一切ない。

このように、紫のあり方が原初的物象的であるのは、紫が生活に密着していることを示している。そして、とくに注目されるのは、紫草から生産された紫色を衣類(衣・帯・紐・縵)に染める過程、あるいは植物の生態のままの「紫草」が詠まれていることである。

3 大衆的国民的な歌

類歌性に富む大衆的な歌 次に、作者名の有無、収載されている巻の傾向をみる。紫の歌で作者の分明する歌は、第一期の額田王の①と大海人皇子の②、第三期の麻田陽春の④、第四期の笠女郎の③の四例だけで、他の一三例は作者未詳歌である。作者ならびに作歌年代の不明な歌は、巻七に三例、巻十・巻十一に各一例、巻十二に五例、巻十四に一例、巻十六に二例あつて、いずれも本来作者名を記さないことを建前にした巻だけに収載されている。これら作者不明歌集というべき巻々には類歌性に富む大衆的な歌が多く、等質性が高くて共感を呼ぶ謡い物・地方歌謡ないしは民謡を収めている。これらの巻には年代的に新しい作もあるけれども、歌の詠み方が非個性的で古い。こうしてみると、紫は多く無名の大衆によって愛好され、恋の歌に用いられているとわかる。

譬喩歌と寄物陳思歌 次に、紫の歌を部立ないしはその歌われ方からもう少し詳しく見る。それは、大体譬喩ないしは寄物陳思(物に寄せて思ひを陳ぶる)で歌われる傾向を持っている。明らかに譬喩歌に分類されているのは四例(③・⑤・⑥・⑦)、寄物陳思歌が五例(⑨・⑩・⑪・⑫・⑬)である。

次に、これ以外の六例を見る。⑧と⑰は譬喩歌とみられる。②の「紫の」は「丹穂」に懸かる枕詞で、寄物陳思的である。④の上三句「韓人の衣染むといふ紫の」は、「染みて」に懸かる序詞で、やはり寄物陳思的である。⑮の上二句「紫草は根をかも終ふる」は、結句「寝を終へなく」と対応していて、これも寄物陳思的である。⑭の上二句「紫は灰指すものぞ」は、「海石榴(樅)」に懸かる序詞で、寄物陳思的であると同時に、「女は男に逢うものぞ」という譬喩にもなっている(九で後述)。このように、紫の歌の一七例中一五例が譬喩ないし寄

物陳思の手法を用いている。

残りの二例は、①「紫野」(葉草狩りの場)と①⑥「紫の大綾の衣」(妻訪いする時の衣)である。

大衆的国民的な基盤 以上、紫の歌に纏綿する恋情、紫の原初的物象的あり方、作者未詳の類型的な歌の多さ、収載されている巻、部立・歌われ方の傾向をみると、生活に密着した染め衣の紫を仲立ちにして、多くは譬喩ないしは寄物陳思(物に寄せて思ひを陳ぶる)の手法で恋を歌い、その歌は大衆的国民的な基盤から生まれている。

三 外来文化

1 文献上の紫

上代の文献 次に、どうして紫に恋情が伴ったかという、発想上の問題を明らかにする。

この紫の歌の発想の基盤を考察するにあたり、まず当時の文献における紫のあり方を知り、『万葉集』の紫のあり方と比較してみなければならぬ。これについては、前述の伊原昭(一九六五)があるので、それをここに要約する。氏は当時の諸文献(上宮太子系譜・上宮記逸文・法隆寺三尊仏光背銘・天寿国曼荼羅繡帳銘・法隆寺金堂釈迦仏光背銘・元興寺丈六光背銘・法隆寺金堂薬師光背銘・大和元興寺路盤銘・伊予道後温湯碑文・法華経義疏・勝鬘経義疏・維摩経義疏・古事記・日本書紀・仏足石歌・懷風藻・風土記・東大寺金堂碑文・歌経標式・高橋氏文・続日本紀・宣命・祝詞・大日本古文書(天平六年―天平宝字七年)・上宮聖德法王帝説など)にみえる紫を、次のように整理している。

概念的抽象的貴族的な紫

(1) 紫色の染料となる植物としての紫草に

ついては、風土記と、大日本古文書のなかの正税帳・計会帳に多数記録されている。

(2) 染めに関する事柄については、いずれも大日本古文書にある記録で、斑・藟・縹・合縹・紋など、種々の細かい技法を伴った染め方が記録されている。また、紫を染める生地の種類も、綾・羅・綾・綺・錦・絶・紬などがある。いずれも高度の技術を必要とする品々である。

(3) 紫という色相のなかの種類の名称については、赤紫・黒紫・滅紫・浅紫・深紫があつて、色相に対する非常に高度にして微妙な識別がなされている。これらの色名は服色令に見られる例である。

(4) 紫で表現された物象については、紫菜・紫苔菜・紫檀・紫雪・紫鉾のように色を示す概念的な色名もあり、また袴・帯・袈裟・紙・袋などが紫によつて表現されている。また、服色令に基づいて紫が位階を示し、紫宸・紫門・紫宮のように、王宮・禁中に関することにも紫を抽象的に用いている。

すなわち、古代の文献に表われた紫は、染料植物としての紫草を含みつつも高度な色相の識別にまで至っており、かつ染色という段階から色を示す概念的な色名、さらには抽象的な色名にまでなっている。

そして、このような紫がみられる古代の文献は、貴族社会における公の服色などに関する記録だったり、正倉院の御物に関する記事だったり、多くは貴族社会の公的な存在である。その実際の紫の品々に接しられるのは、主として特定の貴族たちで、朝廷の儀式や仏教上の事柄に限る時に限られていたようである。

服色令

右の事例の典型として、「服色令」を『日本書紀』から挙げる。以下の『日本書紀』の引用は、『日本書紀下』(一九六八)による。

推古十一年(六〇三)に公布された「冠位十二階」は冠位制の嚆矢で、次第に律令位階制につながっていく。この冠位制に服色令が伴っている。「冠位十二階」は大徳から小智まで十二階の序列を整え、「當れる

色の繩を以て縫へり」とある。ここでの各位階の服色は不詳である。

推古天皇十九年(六一一)・二十年(六一二)・二十二年(六一四)の五月五日の条には、菟田野と羽田などで葉狩りが行われ、参加する「諸臣の服の色、皆冠の色に随ふ」とある。

孝德天皇の大化三年(六四三)に、次の「七色の十三階の冠」が公布された。

一に曰はく、織冠。大小二階有り。織を以て爲れり。繡を以て冠の縁に裁れたり。服の色は並に深紫を用ふる。

二に曰はく、繡冠。大小二階有り。繡を以て爲れり。其の冠の縁・服の色は、並に織冠に同じ。

三に曰はく、紫冠。大小二階有り。紫を以て爲れり。織を以て冠の縁に裁れたり。服の色は浅紫を用ふる。

四に曰はく、錦冠。大小二階有り。其の大錦冠は、大伯仙の錦を以て爲れり。織を以て冠の縁に裁れたり。其の小錦冠は、小伯仙の錦を以て爲れり。大伯仙の錦を以て、冠の縁に裁れたり。服の色は並に眞緋を用ふる。

五に曰はく、青冠。青絹を以て爲れり。大小二階有り。其の大青冠には、大伯仙の錦を以て、冠の縁に裁れたり。其の小青冠には、小伯仙の錦を以て、冠の縁に裁れたり。服の色は並に紺を用ふる。

六に曰はく、黒冠。大小二階有り。其の大黒冠には、車形の錦を以て、冠の縁に裁れたり。其の小黒冠には、菱形の錦を以て、冠の縁に裁れたり。服の色は並に緑を用ふる。

七に曰く、建武。初位なり。又は立身と名ふ。黒絹を以て爲れり。紺を以て冠の縁に裁れたり。別に鍔冠有り。黒絹を以て爲れり。

(孝德紀大化三年の条)

これを見ると、位階の順に深紫、浅紫、眞緋(朱・紅)、紺、緑、黒が並ぶ。ここから、紫が特定の高位高官の服色だとわかる。

この後、孝德天皇の大化五年(六四九)に、「七色十三階の冠の制」を改定して「冠十九階の制」を定め、また天智天皇三年(六六四)にも改定して冠を二十六階にしている。しかし、服色の順は基本的に変わっていないようである。

なお、①・②がうたわれた時の蒲生野の葉狩りは、天智天皇七年(六六八)五月五日のことである。また、その翌年の天智天皇八年(六六九)五月五日にも、山科野で葉狩りを催している。したがって、この時代は天智朝の服色令が適用されている。

2 外来文化・貴族文化への憧憬

紫の対照的なあり方 このように染料植物としての紫草を含みつつも概念的抽象的である貴族的な紫のあり方は、原初的物象的な段階にあり、歌自体も大衆的で類歌性に富む万葉の紫のあり方と、極めて対照的である。

外来文化・貴族文化への憧憬 そこで伊原氏は、この古代の紫のあり方を背景として、万葉の紫の歌が恋歌に結集した経緯についておよそ次のように説く。

寄物陳思や譬喩の歌の媒材は、なるべく新鮮なものがよく、相手の恋人をそれとなく象徴し、相手に印象的な情感を与えるのが理想的である。この点、紫はこれにふさわしいものである。そこで、上流階級の華麗で巧緻な紫と直接関係のない無名の人々が、これに⑩「色懐かしき」愛好の情・憧憬の念を抱き、紫を恋歌に詠み込もうとする。

しかし、何分にも彼らは華麗で巧緻な紫には縁が薄かった。そこで、彼らの実際に接しうる植物としての紫草の生態や、また恐らく紫の染

色作業に携わる彼ら自身の、あるいは彼らの周囲の人々から聞いたであろう染色に関する知識、そしてまたその染色によって完成した数種類の品物という、彼らの生活内で知りうる範囲における紫のあり方を、歌に表現したのではないか。

以上、公の服色の制度・正倉院の御物・仏教関係のものは、いずれも外来文化の強い影響下にあり、この外来文化の影響下にある貴族文化の紫が万葉の紫の歌を生み出した重要な基盤になっている、と氏は説く。

四 恋衣

1 在来文化

庶民生活の染色 確かに、太宰府の官人が詠む④に「韓人の衣染むといふ紫」とあるとおり、大陸渡来の高度な紫染めがあり、青春時代の竹取の翁が妻訪う時に纏った⑩「紫の大綾の衣」や笠女郎が染め上げた③「託馬野に生ふる紫草」による紫衣なども、その高度な貴族文化の服飾である。すなわち、外来文化の影響下にある貴族的な紫衣などが、万葉人の知りうる範囲で恋愛生活に用いられ、それなりに恋歌に表現されている。

しかし、無名の人々が外来文化の恩恵を蒙る貴族文化の紫に憧れて、これを私的な恋の歌や公的な年中行事の場の歌にまで真っ先に取り入れたかという点、そうではないだろう。譬喻歌あるいは寄物陳思歌に用いられる物象のほとんどは、人々にとって最も身近な品ばかりである。万葉の紫染めをはじめとした色衣のあり方は原初的な段階にあり、極めて大衆的である。

直結しない紫と恋 また、この原初的な物象的な紫のあり方は、恋を

主題とする紫の歌のあり方と必ずしも直結していない。すなわち、紫は恋の色としてあまり概念化、抽象化、普遍化されていない。

紫と恋が直結しないのは、次の事情による。一つには、紫の歌が間接的に譬喻ないしは寄物陳思（物に寄せて思ひを陳べる）で詠まれる傾向にあるからである。そしてその二には、紫の歌をことばの連なりからだけ見ていて、その詠まれた基盤を發生的に見ていないからだろう。

恋の染め衣 紫の歌が詠まれた最大の基盤は公私にわたる恋の場に紫草の根による紫染めが付随したことにあり、この紫根染めの縁から譬喻などを用いた恋詞が生まれ、周縁的な恋歌も詠まれるようになったのではなからうか。

こうしてみると、無名の人々に根差した外来文化として紫根染めなどの染め衣が恋の場にまずあり、そこから発想された恋歌が主流だ、と考えるべきだろう。そして、外来文化の影響下にある貴族的な色相の恋歌は、この在来の発想の延長線上にあるのではなからうか。

そこで、次に文字に記されることが極めて少ない庶民の愛情生活における染色に注目し、紫の歌に恋情が伴う発想の基盤を探る。

2 花摺り・葉摺り

花（葉）摺りと恋情発想 『万葉集』の先行形態だといわれる前代までは当代の歌謡（記紀歌謡・古代歌謡）に、紫が歌い込まれていない。

しかし、染法としては紫根染めの前段階にあたる、紫・縹（水縹とも。薄い藍色）などの色を呈するきわめて庶民的原始的な花摺り・葉摺りがあり、『万葉集』にこれらを詠み込む歌が載っている。垣津幡・「月草」・「小水葱」・「萩」・「土針」の花摺り・葉摺りを詠む歌が、それである。「月草」は今日の露草（藍花・縹花・移し花・帽子花と

も)、「小水葱」はミズアオイ、「土針」は松田修(一九七〇、一三九・一四〇頁、五二二・五二八頁)によると今日のメハジキ(一名ヤクモソ)で、その葉摺りによって緑色を染め出す。そして、これら花摺り・葉摺りの歌にも恋情が伴っている。

垣津幡 「垣津幡」を詠む歌は、七例(七―1345・七―1361・十一1986・十一2521・十一2818・十二3052・十七3921)ある。夏の葉狩りの狩衣を詠む(十七3921)を除いて、すべて恋歌である。

摺り衣を明確に述べる例と摺り衣を下地にする例は、以下の五首である。

譬喩としての「摺る」・「着る」

住吉の 浅沢小野の かきつはた 衣に摺り付け 着む日知らずも
(七―1361、譬喩歌、花に寄する)

垣津幡の花を衣に「摺り」・「着る」ことを恋の成就に譬えている。すなわち、恋する男女が垣津幡の花摺りの紫衣を着て相逢う習俗を下地にしており、その衣を摺って着ることが恋の成就を意味している。

葉狩りの狩衣

十六年四月五日に、独り平城の故宅に居りて作る歌六首
(うち一首)
かきつはた 衣に摺り付け ますらをの 着襲ひ狩する 月は来にけり
(十七3921)

右の六首の歌、天平十六年四月五日に、独り平城故郷の旧宅に居りて大伴宿禰家持作る。

夏四月の年中行事・葉狩りで丈夫が垣津幡摺りの狩衣を着ている。この例は垣津幡の歌でただ一つ恋情を伴っていないものの、この葉狩りの紫の狩衣にも恋情が伴いやすいことは、同じ葉狩りにおける額田王と大海人皇子の贈答歌①・②に示されている(一〇で後述)。

垣津幡丹つらふ妹(君)

我のみや かく恋すらむ かきつはた につらふ妹は いかにかあるらむ
(十一1986、夏の相聞、草に寄する)

かきつはた につらふ君を ゆくりなく 思ひ出でつつ 嘆きつるかも
(十一2521、正に心緒を述ぶる)

「垣津幡丹つらふ妹(君)」は、恋する男女が垣津幡の花摺りの紫衣を着て相逢う習俗から発想された恋人賛美の恋詞である。すなわち、垣津幡の花を摺り付けることが「丹つらふ」ことであり、そうしてできた衣の美しい色相が愛する恋人の美麗さを形容している。

なお、この二首は葉狩りの歌とも解せる(一〇で後述)。

「丹つかふ」と「丹穂ふ」 「丹つらふ」(色を染める義)と同義の動詞が、「丹つかふ」・「丹穂ふ」である。それを示す用例は、例えば次の歌である。

⑩ さ丹つかふ 色懐かしき 紫の 大綾の衣

(二六3791)

引馬野に (大宝) 二年壬寅、太上天皇、参河国に幸す時の歌
にほふ榛原 入り乱れ 衣にほはせ 旅のしるしに

(二57、雑歌、長忌寸奥麻呂)

二首目の歌は、引馬野に色づいている榛の木の原に入りまじり、衣を「丹穂はせ」（摺って染めよ）、旅の証しとして、と述べている。榛の実による榛摺りは、黒色を呈する。

女人の譬喩 恋する男女が垣津幡の花摺りの紫衣を着て相逢う習俗が定着してくると、次のように染料の垣津幡が女人の譬喩になる。

常ならぬ 人国山の 秋津野の かきつはたをし 夢に見しか
も (七―1345、譬喩歌、草に寄する)

『萬葉集全注巻第七』（一九八五、三三二頁）によると、「人国山の秋津野」は和歌山県田辺市秋津野で、その垣津幡は遠くの他人のものを暗示している。この恋歌は垣津幡の花摺りを妻訪いの衣と明示していないものの、垣津幡摺りを着て妻訪いした習俗を下地にし、他国の美しい人妻を恋衣の染料の垣津幡に譬え、恋慕している。

このように妻訪いの衣の染料（原料）を愛しい女人に例える例は、以下、小水葱（三―407）・土針（七―1338）・⑬紫草（十二―3099）・⑥砂地（七―1392・十二―3168）として登場する。

月草 「月草」を詠む歌は、九例（四―583・七―1255・七―1339・七―1351・十一―2281・十一―2291・十一―2756・十二―3058・（十二―3059）で、すべてが恋歌である。摺り衣を明確に述べる例と摺り衣を下地にする例は、以下の六例である。

妻訪いの現場 月草で染めた文様が斑になるので、次のように「斑の衣」ともいっている。

月草に 衣ぞ染むる 君がため 斑の衣 摺らむと思ひて
(七―1255、雑歌、臨時)

月草の斑の衣を恋人のための摺り染めにする、と述べている。これは妻訪いの現場を述べたもので、女は恋人のために色美しい衣類を整えている。

標の帯を贈る女 この月草で摺り染めにした色を、「標」あるいは「水標」という。青春時代の竹取の翁が妻訪いした⑯「娘子がほの聞きて我におこせし水標の絹の帯を引き帯なす韓帯に取らせ」とあるように、ここでも「娘子」が「水標の絹の帯」を青春時代の翁に贈っている。女がこのような色美しい衣類を作って男に贈ることは、女の愛の証しである。

標の帯を取られる女 次の平安時代の催馬楽「石川」は、女が月草で染めた「標の帯」を身に纏って男を迎えていることを示している。以下の催馬楽の引用は、『古代歌謡集』（一九六八）による。

石川の 高麗人に 帯を取られて からき悔する
いかなる いかなる帯ぞ 標の帯の 中はたいれるか かやる
か あやるか 中はいれたるか

異説「なかはたいれたるか」 (催馬楽―58、石川)

河内国の石川郡の高麗人と情交関係にあった女が、共寝の翌朝に「標の帯」を持ってゆかれて大困りしている、と述べている。「中はたいれるか」とその類語・「かやるかあやるか」はよく分からない。

「娘子」から「水標の絹の帯」を贈られる青春時代の竹取の翁がいる一方で、逢い引きの翌朝、愛の形見として断りもなく女の「標の帯」を持ち帰る「石川の高麗人」もいた。高麗人はこれを女の愛の証しとして女にもてることを誇ったろう。

恋心の変わりやすさの譬喩 月草摺りは色が「うつろひ」やすい（褪せやすい）ことから、恋心の変わりやすさを導いている。以下の五首

はそれを下地にしている。

月草に 衣色どり 摺らめども うつろふ色と 言ふが苦しき

(七―1339、譬喩歌、草に寄する)

「月草に衣色どり摺」ろう(恋を成就しよう)とするものの、心変わりしやすい恋を心配している。

月草に 衣は摺らむ 朝露に 濡れての後は うつろひぬとも

(七―1351、譬喩歌、草に寄する)

やがて恋心が変わってもいいから「月草に衣は摺らむ」(恋を成就させよう)、と述べている。この歌は、『古今和歌集』(四―247、秋歌上、読み人知らず)に重出している。すなわち、月草染めの恋衣を着て妻訪う(夫・恋人を迎える)習俗から生まれた万葉歌が、平安初期にもそのまま愛唱されていた。

大伴坂上家の大娘、大伴宿禰家持に報へ贈る歌四首(うち

一首)

月草の 移ろひやすく 思へかも 我が思ふ人の 言も告げ来ぬ

(四―583、相聞)

月草摺りのように恋人が心変わりしたらしい、と述べている。

うちひさす 宮にはあれど 月草の うつろふ心 我が思はな

く (十二―3058、物に寄せて思ひを陳ぶる)

百に千に 人は言ふとも 月草の うつろふ心 我持ためやも

(十二―3059、物に寄せて思ひを陳ぶる)

右の二首は、月草摺りのように心変わりしない、という愛の誓い歌である。

古今集の月草 「月草に衣は摺らむ」(七―1351)がそのまま平安初期に愛唱されたように、万葉歌の「月草のうつろふ心」は『古今和歌集』に次のように歌われている。以下の『古今和歌集』の引用は、『古今和歌集』(一九七八)による。

いで人は 言のみぞよき 月草の うつし心は 色ことにして

(古今集、十四―711、恋歌四、読み人知らず)

小水葱 「小水葱」ないしは「水葱」を詠む歌は、四例(三―407・十四―3415・十四―3576・十六―3829)ある。食物の「水葱の羹」を述べる(十六―3829、酢・醬・鯛・水葱を詠む歌)を除く三例が、摺り衣を下地にした恋歌である。

譬喩としての「摺る」

苗代の 小水葱が花を 衣に摺り なるるまにまに あぜかかなしけ

(十四―3576、譬喩歌)

小水葱の花摺りの衣を着て妻訪いすることを下地にして小水葱を衣に「摺る」ことを恋の成就に譬え、恋が成就した後も小水葱の花摺りの衣が「馴るる」ほど通う(足繁く通って相手に「馴るる」につれて一層愛しくなる、と述べている。

恋の染料

上野 伊香保の沼に 植ゑ小水葱 かく恋ひむとや 種求めけむ
(十四・3415・相聞)

小水葱・水葱の用途は、食料ないしは染料しかないだろう。とする
とこの歌意は、「水葱の羹」(十六・3829)のように「小水葱」を
食料にするつもりで「上野伊香保の沼に」「種」を「求め」て「植ゑ」た
はずなのに、結果的には恋人に逢うときに着る衣を摺るために「小水
葱」の「種」を「求め」た格好になった、ということだろう。この恋歌
は小水葱の花摺りを妻訪う(夫・恋人を迎える)ための衣とは明示し
ていないだけで、小水葱の用途が食料(食い気)から恋の染料(色気)
に変わった、と意外な成り行きの恋を面白おかしく述べている。

女人の譬喩

大伴宿禰駿河麻呂、同じ坂上家の二嬢を娉ふ歌一首
春霞 春日の里の 植ゑ小水葱 苗なりと言ひし 柄はさしに
けむ (三・407、譬喩歌)

大伴駿河麻呂が坂上家の二嬢を妻訪いした恋歌である。「小水葱」
は「苗」から「柄はさし(生えの義)」、花を咲かせて恋の花摺りに用い
られる。そこで、小水葱を二嬢の譬喩にし、小水葱が恋の花摺りにで
きるだろう(恋の対象にできる妙齡になったろう)、と述べている。こ
の恋歌も小水葱の花摺りを妻訪いの衣と明示していないものの、小水
葱の花摺りを着て妻訪いした習俗を下地にしている。

萩「萩」の用例は一四二例あるものの、摺り衣を詠む例は少ない。
その主な用例を次に挙げる。

牽牛・織女の花摺り

我が待ちし 秋萩咲きぬ 今だにも にほひに行かな 彼方人
に (十一・2014、秋の雑歌、七夕)

(遣新羅使の大使、)七夕に天漢を仰ぎ観て、各所思を陳べ
て作る歌三首(うち一首)
秋萩に にほへる我が裳 濡れぬとも 君がみ舟の 綱し取り
てば (十五・3656)

この二首は、七夕の牽牛・織女の恋を述べている。この恋人たちは
萩の花摺りの衣を着て、相逢おうとしている。ここの「丹穂ひ」・
「丹穂へる」は萩の花摺りで衣を紫に染めることである。すなわち、
一首目は牽牛が妻訪いする衣を織女に萩摺りにしてもらおうとし、二
首目は織女が裳を萩摺りにして牽牛を迎えようとしている。中国の七
夕伝説には摺り衣・染め衣の要素はないものの、日本の在来の恋愛習
俗が七夕伝説に反映している。こうして、秋をいち早く告げる萩の花
摺りは、七夕でしか逢えない牽牛・織女にとって待ち遠しい恋の衣に
なっている。

恋の花摺り

ことさらに 衣は摺らじ をみなへし 佐紀野の萩に にほひ
て居らむ (十一・2107、秋の雑歌、花を詠む)

特に恋のために摺り衣を用意しなくても、野にいれば萩の花摺りが
できる、と述べている。

我が衣 摺れるにはあらず 高松の 野辺行きしかば 萩の摺れるぞ
(十一・2101、秋の雑歌、花を詠む)

萩の花摺りが他の誰かを妻訪う(恋人を迎える)ための衣でなく、野辺を行ったら自然と染まったものだ、と恋人に弁解している。

笠朝臣金村の、伊香山にして作る歌二首(うち一首)
草枕 旅行く人も 行き触れば にほひぬべくも 咲ける萩かも
(八・1532、秋の雑歌)

旅先の萩を見て、萩の花摺りができそうだ(萩の花摺りを着て妻訪いできそうだ)、と旅先での恋を予感している。

以上、いずれの萩摺りにも恋情が伴っている。

萩の花摺りの交換 催馬楽の「更衣」は恋人同士が愛の証しとして萩の花摺りの衣を交換することを述べている。

更衣せむや さきむだちや 我が衣は 野原篠原 萩の花摺や
さきむだちや
(催馬楽・21、更衣)

「さきむだちや」は囃子詞である。

土針 「土針」を詠む歌は次の一例で、やはり摺り衣を詠み、恋の歌である。

女人の譬喩

我がやどに 生ふる土針 心ゆも 思はぬ人の 衣に摺らゆな
(七・1338、譬喩歌、草に寄する)

恋する者が土針の葉摺り(緑色を呈する)を着ることから、衣を摺ることが恋の成就の譬喩になる。そこで、土針(娘)よ、心底思わない男の妻訪いの衣に摺られるな(愛を成就させるな)、と家の娘などに言い聞かせている。この歌の土針は、女人の譬喩になっている。

3 摺り衣・斑の衣

摺り衣 これら紫色や緑色を呈する原始的な花摺り・葉摺りを含めて、草木の花や実の類や黄土の類で摺った衣は、「摺り衣」といわれ、またその文様が斑になるので「斑の衣」ともいわれる。摺り衣を詠む例は、次の一首だけである。

摺り衣 着りと夢に見つ 現には いづれの人の 言か繁けむ
(十一・2621、物に寄せて思ひを陳ぶる)

恋する者が摺り衣を着るといふ習俗を踏まえ、摺り衣を着たという夢によって来るべき恋を知り、恋の相手が誰か、と推量している。

斑の衣 「斑の衣」を詠む例は、前述した月草の「斑の衣」(七・1255)を含めて三首ある。

時ならぬ 斑の衣 着欲しきか 島の榛原 時にあらねども
(七・1260、雑歌、臨時)

時季前の榛摺りの「斑の衣」を着たい(うら若い女との恋をしたい)、と述べている。榛の実が熟するのは秋で、その実を衣に摺ると黒色を呈する。この榛摺りの斑の衣も、恋する者の着る衣である。

今作る 斑の衣 面影に 我に思ほゆ いまだ着ねども

(七—1296、譬喩歌、衣に寄する)

恋する者が着る「斑の衣」を作りながら、「いまだ着ねども」(恋人と逢っていないものの)、「斑の衣」を着て恋人に逢っている「面影」が自然と浮かぶ、と述べている。

斑衾 また、次の「斑衾」もこの「斑の衣」の類だろう。

寸戸人の まだら衾に 綿さはだ 入りなましもの 妹が小床に
(十四—3354、相聞、遠江国の歌)

「寸戸人」(遠江国鹿玉郡の伎倍地方の人)の作る「斑衾」は真綿(繭から採る)がたくさん入った掛け布団で、誰もこれに入って寝たい特産品だろう。そして、この「斑衾」は同時に「妹が小床」でもあり、愛の寝床だった。男はこの斑衾に入って恋人とともにたつぷりと寝たいという。こうしてみると、この斑衾は恋する者が着る摺り衣の巨大化した姿と見られよう。

以上の「摺り衣」・「斑の衣」・「斑衾」は恋する者の纏うもので、すべて恋歌に用いられている。これらの斑は、⑫「紫の斑の縷」に連なっている(一一で後述)。

信夫振摺り 平安時代に下ると、「斑の衣」の恋歌として次の例がある。以下の『伊勢物語』の引用は、『伊勢物語』(一九九六)による。

陸奥の しのぶもちずり 誰ゆゑに 乱れむと思ふ われなら
なくに
(古今集、十四—724、恋歌四、河原左大臣)

『伊勢物語』初段では下の句は、「乱れそめにし我ならなくに」とあ

り、この形で百人一首にも採られている。「信夫振摺り」は「乱れ染め」で有名な特産品で、万葉人の恋の習俗を継承して恋する者が愛用した染め衣だったろう。それで、この恋人の愛用した斑の衣・振摺りの「乱れ染め」から恋心の「乱れ初め」へ転化する恋詞が生まれたろう。

譬喩としての「摺る」・「着る」と恋人賛美 以上、恋する者が紫などの摺り衣を着る習俗を基盤にして、「摺る」・「着る」という行為の多くが、「恋心を抱く」、あるいは「男女の仲が成立すること」を意味している。また、摺った色の褪せやすいことから恋心の変わりやすさを導いている。ここでは、主題である恋と摺り衣が融合してきている。その作者未詳歌を中心としたあり方は、殊更な趣向や修辭に擬らないもので、標準的類型的な謡い物あるいは謡い物風の歌になっている。また、「摺る(染む)」と同義の「丹つらふ」から愛する恋人の美麗さを賛美する「垣津幡丹つらふ妹(君)」が生まれている。そして、恋する男女が着る色衣の染料になる植物(垣津幡・小水葱・土針など)を、愛しい恋人の譬喩にしている。

このように花摺り・葉摺り・摺り衣・斑の衣などの歌のほとんどは類型的な作者未詳歌で、紫の歌のあり方とはほぼ同じなので、これらの歌は紫の歌の発想基盤を考察するときには有力な手懸かりを与える。

4 恋衣

着馴らす恋衣 このように見てくると、紫色や緑色を呈する原始的な花摺り・葉摺りによる衣や、その他の染料で染められた「摺り衣」・「斑の衣」が、恋人の着る衣類、すなわち「恋衣」であることに思い至る。「恋衣」の用例は、『万葉集』に次の一例だけある。

恋衣 著奈良の山に 鳴く鳥の 間なく時なし 我が恋ふらく
は (十二―3088、物に寄せて思ひを陳ぶる)

この歌も類型的な恋歌で、この歌の主旨は下三句「間なく時なし我が恋ふらくは」にある。この平易な恋詞は(四―760)・(十二―3168)にもあり、類句になっている。また、編者は寄物を「鳥」に求めているものの、上の句の「恋衣著奈良(馴ら)」もまた寄物陳思(物に寄せて思ひを陳ぶる)になっている。そして、「恋衣」が次の「著」と繋がつて「馴ら」に懸かるのも類型的である。次の歌はその類例である。

苗代の 小水葱が花を 衣に摺り なるるまにまに あぜかか
なしけ (十四―3576、譬喩歌)

紅の 八入の衣 朝な朝な なれはすれども いやめづらしも
(十一―2623、物に寄せて思ひを陳ぶる)

この二首は、小水葱摺り・紅染めの衣を着馴らしてしまうほど足繁く恋人の許に通って恋人に馴染んでも、いよいよ魅力を感じる、という意である。

「恋衣著奈良の山」(十二―3088)は、「著馴ら」がこれと同音の「奈良」を導く修辭になり、「奈良の山に鳴く鳥の」ように恋人を思う気持ちが続く、と述べる。すなわち、恋衣を着馴らしてしまうほど足繁く恋人の許に通って馴染んでも、いよいよ魅力を感じて恋人を頻りに思っている、という意で、結局「小水葱」(十四―3576)・「紅の衣」(十一―2623)と同一趣旨・趣向を取っている。

こうしてみると、「恋衣」は小水葱摺りの衣・紅の衣・斑の衣などの

総合的な別称で、恋人が恋の場で着る用途に注目した名称だといえる。
着馴らす韓衣 また、この「恋衣著奈良の山」(十二―3088)と酷似する例として、次の「韓衣著奈良の里」(六―952)がある。この歌は(六―951)に答えた形になっているので、この二首を挙げる。

(神亀) 五年戊辰、難波宮に幸す時に作る歌四首(うち二首)
見渡せば 近きものから 岩隠り かがよふ玉を 取らずは止
まじ (六―951)

韓衣 著奈良の里の 妻まつに 玉をし付けむ よき人もがも
(六―952)

一首目の作者の立場は男で、「かがよふ玉」は得がたい女性の譬喩になっている。「玉」を理想の女性に譬える類例は、巻七の譬喩歌の「玉に寄する」―一首(1317―1327)をはじめ多数ある。その歌意は、見渡すと近くにあるながら岩に隠れて輝く玉(理想的な女性)を取らずにはおかぬ、というものである。

これに答えた二首目の作者の立場は、女である。この歌の「玉」は難波の土産としての玉であり、「韓衣」は大陸風の衣(朝鮮半島や唐から渡来した技術による衣)である。その歌意は、「韓衣」を着馴らすほど足繁く「奈良の里」(の女の許)に通った「夫」(一首目の作者)を「待つ」「松」(愛妻)にその「玉」をつけてくれる良い人(夫)がいればいい、ということである。ここの「韓衣著奈良の里」は「恋衣著奈良の山」(十二―3088)と同位相にある。したがって、「韓衣」も恋衣の一種だとわかる。とすると「韓衣著奈良の里」(六―952)は、あなたには恋衣を着馴らしてしまうほど馴染みを重ねた最愛の妻

が都にいて、あなたの帰りを待っているのです、その方へのお土産として玉を贈る人（あなた）がいればいい、くらしいの歌意である。こう述べて、女は自分に迫る男の恋心をはぐらかしている。したがって、「韓衣著奈良の里」（六―九五二）の「妻まつに」は「夫まつに」とあるべきところである（一二で後述）。

恋衣としての韓衣 また、「韓衣」が「恋衣」であることは、次の歌からもわかる。

韓衣 君に打ち着せ 見まく欲り 恋ひそ暮らしし 雨の降る日
（十一―二六八二、物に寄せて思ひを陳ぶる）

雨の降る一日中、韓衣をあなたに着せてそれを見たいと恋ひ暮らした、と述べている。すなわち作者の女は、自分の作りあげた恋衣の韓衣を恋人に着せて相逢っている場面を想像している。この歌は、「斑の衣」を着て恋人に逢うことを想像している（七―一二九六）と同類である。

以上のように、「恋衣」には染めたり摺ったりした衣類の他に、大陸風の衣もあった。

平安初期の韓（唐）衣 『古今和歌集』（九―四一〇）と『伊勢物語』九段では、東下りした昔男が旅先で、都の馴染んだ妻を恋慕して次の歌を詠んでいる。

唐衣 着つつなれにし つましあれば はるばる来ぬる 旅をしぞ思ふ
（古今集、九―四一〇、羈旅歌、在原業平朝臣）

恋衣の「唐（韓）衣」（大陸風の恋衣）を着馴らしてしまうほど馴染みを重ねた最愛の妻が都にいたので、その都から遙々やってきた辛い

旅を思う、という意である。恋衣の「唐（韓）衣」を着て妻訪いた都の妻を偲び、これに旅愁を重ねている。

また、『古今和歌集』に「唐（韓）衣」の歌として次の恋歌がある。

唐衣 なれば身にこそ 纏はれめ 掛けてのみやは 恋ひむと思ひし
（古今集、十五―七八六、恋歌五、題知らず、景式王）

恋衣の「唐衣」を着馴れるほど足繁く妻訪いすればこそ打ち解けられように、恋衣の「唐衣」を衣桁に掛けたままで（疎遠になって）心に掛けて恋ひ慕うだけになると思ったことか、と恋の悩みを述べている。

唐衣 日も夕暮れに なるときは 返す返すぞ 人は恋しき
（古今集、十一―五一一五、恋歌一 読み人知らず）

日も夕暮れ時になると、繰り返し繰り返しあの人を恋しい、と述べている。「唐衣」は「紐結ふ」の連想から「日も夕暮れ」にかかる枕詞になっている。夕暮れは恋人たちが恋衣の「唐衣」の紐を結って逢い引きに行く時間なので、「日も夕暮れ」を導く枕詞の「唐衣」は恋の現場を踏まえた有心の修辭である。

以上のように、「韓（唐）衣」を恋衣にする伝統は、平安時代にも継承されている。

五 妻訪いの紫衣

1 竹取の翁の青春

竹取の翁の青春 以下、恋衣の代表である紫根染めの紫の歌について

て述べる。

⑯竹取の翁の長歌を見ると、前述の恋衣がさらに増える。恋衣の多くが⑯に集中しているといつていいほどである。その恋衣は次の八例あり、青春時代の竹取の翁はこれをすべて身に纏っている。

- (1) さ丹つかふ 色懐かしき 紫の大綾の衣
 - (2) 住吉の 遠里小野の ま榛もち 丹穂しし衣に
 - (3) 高麗錦 紐に縫ひ付け 刺部重部 なみ重ね着て
 - (4) 打麻やし 麻統の子ら あり衣の 宝の子らが うつたへは 綜て織る布
 - (5) 日ざらしの 麻手作りを 信巾裳成者之寸丹取為(脛裳に取らし?)支屋所経
 - (6) 稲置娘子が 妻問ふと 我におこせし 彼方の 二綾裏沓
 - (7) 飛ぶ鳥の 明日香壮士が 長雨忌み 縫ひし黒沓 刺し履きて 庭にたたずめ
 - (8) 罷りな立ちと 禁め娘子が ほの聞きて 我におこせし 水縹の 絹の帯を 引き帯なす 韓帯に取らせ 海神の 殿の甍に 飛び翔ける すぎるのとき 腰細に 取り飾らひ
- (二六—379)

貴族文化の恋衣

難解で正確に理解しがたい部分もある。青春時代の翁が妻訪いした時に纏った「衣」・「紐」・「帯」・「脛裳」・「沓」の描写は、およそ上半身から下半身にむかっており、過剰なほどに華麗である。これらの装身具は、当時の恋愛生活で用いられた恋衣をよほど誇張している。

(1)「紫の大綾の衣」は麗しい恋情にからまる紫衣なので、「さ丹つかふ色懐かしき(色鮮やかで色が心引かれる)」が「紫」に冠することに

なる。八つの恋衣の筆頭に紫衣が登場するのは、紫が恋の色の代表だからだろう。この紫根染めの大綾の衣は高度な技術を要した高価なもので、正に貴族文化の典型だった。以下の衣類も同様だろう。

(2)「住吉の遠里小野のま榛もち丹穂しし衣」は、この地域の名産の黒衣である。次の歌は同地の榛摺りの衣を詠んでいる。

住吉の 遠里小野の ま榛もち 摺れる衣 盛り過ぎ行く
(七—1156、雑歌、摂津にして作る)

(3)「高麗錦紐」は、朝鮮渡来の錦(あるいは朝鮮様式の錦)で作った紐である。「高麗錦紐」が恋衣の一類であることは、妻訪いの現場を詠む次の歌からもわかる。以下の記紀歌謡の引用は、『古代歌謡集』(一九六八)による。

高麗錦 紐の片方ぞ 床に落ちにける 明日の夜し 来なむと
言はば 取り置きて待たむ (十一—2356、旋頭歌)

恋人の置き忘れた恋衣の高麗錦の紐に託して女が今晚の逢い引きに誘っている。この歌は、暁の別れに女が男に歌いかけている。ここでは日没から一日が始まっているので、「明日の夜」は今晚になる。

高麗錦 紐解き放けて 寝るが上に あどせろとも あやに
かなしき (十四—3465、相聞)

恋衣の高麗錦の紐を解き放って共寝したのに、なおかつ堪らなく愛しい、と官能的に述べている。

細紋形 錦の紐を 解き放けて 數多は寝ずに ただ一夜のみ

(元恭紀八年の条、紀歌謡66、元恭天皇)

「細紋形錦の紐」も恋衣の一類で、この紐を解き放って「衣通の郎姫」と共寝したのは一夜だけだ、と天皇は恋人をいとおしんでいる。

(4)「打麻やし麻続の子らあり衣の宝の子らがうつつたへは綜て織る布」は、機織工人の織った本格的な布である。

(5)「日ざらしの麻手作り信巾裳成者之寸丹取為(脛裳に取らし?)」

支屋所経」はとくに難解ながら、麻製の脛裳のようである。「者之寸丹取為」を「脛裳に取らし」と読むのは、新潮日本古典集成『萬葉集四』

(一九八二)によった。

(6)「稲置娘が妻問ふと我におこせし彼方の二綾裏沓」は、「稲置娘」が愛の証しとして贈ってきた「二綾裏沓」(二色交ぜ織りの綾の足袋)である。

(7)「飛ぶ鳥の明日香壮士が長雨忘み縫ひし黒沓」は、工人の「明日香壮士」が作った、長雨にも耐える「黒沓」である。

(8)「娘がほの聞きて我におこせし水縹の絹の帯」は、「娘」が愛の証しとして贈ってきた「水縹の絹の帯」である。この帯を「引き帯」のように「韓帶」(大陸様式の帯)風に身に帯びている。四で述べたように、「水縹」は月草などで染めた薄い藍色である。

こうしてみると、恋衣には染め衣・色衣・大陸渡来の織物の他に、(4)・(5)のように熟練工の丁寧に作り上げた布製の装身具も含まれている。

以上、高度な技術を要した外来の色衣、織物を中心とした多くの色美しい「恋衣」を纏って妻訪いした青春時代の翁は、文字どおり「色男」で、道を歩くと宮仕えする女や舍人男がこっそりと振り返りながら「誰が子そ」(どこの貴族の御曹子かしら)と思われるほどだった。

これほどの恋衣を纏った妻訪いの描写はこの例だけで、他は一品を纏う程度である。

女人が恋人に衣を贈る この長歌では自前の恋衣の場合が多いものの、(6)「二綾裏沓」と(8)「水縹の絹の帯」のように女人が愛する男のために贈る場合もある。このように恋人・夫のために衣を「染む」「摺る」「織る」と明言した例としては、次の代表的な恋歌がある。

月草に 衣を染むる 君がため 斑の衣 摺らむと思ひて (七―1255、雑歌、臨時)

君がため 手力疲れ 織りたる衣ぞ 春さらば いかなる色に 摺りては良けむ (七―1281、旋頭歌)

青春時代の竹取の翁は二人の女性からこの恋衣を(6)・(8)のように貰っているのだ、恋を成就している愛人が複数いることを誇っていることになる。

榛摺りによる娘子の愛の告白

⑯は春の国見における野遊び(歌垣)での歌で、老人が自らの盛時を振り返りながら老いを嘆いてみせ、野遊びに参加している若者たちを戒める風習に基づいている。この竹取翁の歌⑯とその「反歌二首」(十六―3792・3793)は、翁をあなどってからかう九人の娘子(若者)らに、八種類の恋衣を着て華やかに妻訪いした青春時代の若者(竹取翁)であつても、老いれば例外なく老醜を曝すので、あなたたちも白髪になったら若者たちにあなどられるだろう、と述べ立てる。

この道理に娘子らは深く感動し、それぞれ一首ずつ歌で翁に愛を告白し、愛を成就する(共寝する)と述べる。土橋寛(一九八六、八九頁)によると、この遣り取りは「歌垣で歌掛けに負けた娘は、相手の男

の意思に従わねばならないという不文律」に基づく創作である。次の歌はそのうちの八人目の娘子の恋歌で、恋衣の発想を取っている。

娘子等の和ふる歌九首（うち一首）

住吉の 岸野の榛に にはふれど にははぬ我や にはひて居らむ
(十六ー3801)

通説はおよそ、「我や」の「や」を軽い疑問、「にはふ」（摺り染まる・摺り染める）を女友達と同調すると解する。しかし、この歌が長歌の(2)「住吉の遠里小野のま榛もち丹穂しし衣」に応えた形になっており、「丹穂ふ」を三度用いていることも考慮しなければならぬだろう。とすると、「や」を感動、「丹穂ふ」を恋衣を摺り染めにする実意とともに恋心を抱く・恋を成就することの譬喩と解釈するのがいいようである。すなわち、男が恋衣として住吉の岸野の榛の実で恋衣を摺り染めにして妻訪いしても、同じように恋衣を染めて男を迎えようとしな（恋心を抱かない堅物の）私がさあ、恋衣を染めて翁を迎え、恋を成就させよう、という歌意になろう。このように解することによって、青春時代の翁の着た榛摺りの恋衣に呼応し、恋に無縁だった娘子がまるで青春時代の翁の愛人であるかのように翁と同じ榛摺りの恋衣を染めて着て相逢おう（恋を成就しよう）としていることになる。

なお、⑬を核とした竹取翁の歌群は国見における野遊び（歌垣）を場としているものの、そこで述べられている恋衣は私的な妻訪いを反映している。すなわち、翁が私的な妻訪いで着た八種類の恋衣はもとより、娘子が歌う（十六ー3801）の「住吉の岸野の榛」摺りもその延長線上にあり、これらは年中行事の野遊び（歌垣）で着る小忌衣ではない、と考えられる。

2 紫の帯を解く

紫の帯を解く 次の⑩「紫の帯」も恋衣の一種で、この歌も恋の現場をそのまま述べている。

⑩紫の 帯の結びも 解きも見ず もとなや妹に 恋ひ渡りなむ
(十二ー2974、物に寄せて思ひを陳ぶる)

作者の男は恋衣の「紫の帯」を締めて妻訪いしたものの、「紫の帯の結び」を「解くこと（共寝すること）もなく、恋に苦しんでいる。

帯や紐を解くことが共寝を意味する類歌は、前述の「高麗錦紐」（十四ー3465）・「細紋形錦の紐」（紀歌謡66）など多くある。とすると、これらの帯や紐もすべて恋衣の一種だということになる。そして、その歌い方も標準的類型的である。

3 紫の「根」と「寝」

東国の紫の恋 次の東歌⑮は、恋衣の習俗を下地にしている。

⑮紫草は 根をかも終ふる 人の児の うらがなしけを 寝を終へなく
(十四ー3500、相聞)

「心愛しけ（き）」「人の児」（娘）を足繁く妻訪いしたために恋衣の染料として紫根を使い果たしたのに、未だに共寝を果たしていない、と語呂合せ（ネー根・寝ーを終ふ）で洒落ている。

報われない恋の諸謎 上二句を詠嘆表現とみ、「紫草の根を恋衣の染料としてすべて使い果たすよ」と解し、下三句を「愛しい娘との共寝

を一度も遂げていないのに」と解するのは、恋衣の紫衣を限りなく整えて妻訪いしたのに一度の共寝もないという、両極の際立つ対比がこの歌の眼目だからである。このように、手段（恋衣・紫衣を染めて着ること）と目的（共寝）がまるで噛み合わないこと・草臥れ儲けのおかしさ・報われない恋の諧謔が、この歌の主題である。

東国の民謡 『万葉開眼（下）』（一九七八、一五一―一五三頁）は、この歌について次のように説く。民謡的性格がいちじるしいもので、前句に景物（A紫草）を出し、後句に人事（B人の児の心愛しけ）を述べて、脚韻的繰り返し（C根をかも終ふる・寝を終へなく）で結合している（今の場合はAC―BCの形）。このような対立構造は民謡によく見られるので、⑮は機智の活躍する笑いを目的とした民謡だとみられる。

もし東人が貴族専用の紫衣を生産する立場にだけあったとすれば、彼ら東人が恋衣・紫衣を着て妻訪いしたと述べ、かつ民謡として諧謔の語呂合わせまでしている⑮のこなれ様を、どのように説明できようか。この歌は、東国の庶民も恋衣・紫衣を生産して着用し妻訪いしていたことを明示している。

古今集の女の紫の元結 以上は、男が紫の色衣などを纏って妻訪いしている例である。これに対して、女も紫衣などの恋衣を身につけて男を迎えている。例えば、『古今和歌集』の次の歌は、女性が「濃紫の元結」をして恋人・夫を待つ、と述べている。

君来ずは 関へも入らじ 濃紫 わがもとゆひに 霜はおくと
も (古今集、十四―693、恋歌四、読み人知らず)

この女性の髪を束ねる「濃紫」の「元結」は、妻訪いの現場における恋衣の一類である。

六 紫の修辭

1 紫の色に出づ

妻訪いの現場 次の⑪「紫の下紐」は妻訪いの現場を述べながら、「色に出づ」を導く序詞・修辭になっている。

⑪紫の 我が下紐の 色に出でず 恋ひかも瘦せむ 逢ふよしを
なみ (十二―2976、物に寄せて思ひを陳ぶる)

「紫の我が下紐」も恋衣の一つで、これを身につけて恋人に逢おうとしている。「紫の下紐」は恋していることの証しで、上二句は妻訪いの現場を示している。

紫の下紐の色に出づ 上二句「紫の我が下紐」は紫染めなので、生産過程としては「色に出づ」るものである。そこで、これを恋の譬喩に転化し、恋心を顔・表情に出す意の「色に出づ」に用いるようになる。こうして、この恋衣の「紫の我が下紐」は恋情表現の常套句「色に出づ」を導く有心の序詞・修辭になっている。すなわち、「色に出づ」は恋衣の染色の生産叙事から発想された恋詞である。

ただしここでは、下着の紐なので色が表に出にくいので、「色に出でず」、すなわち恋心を顔・表情に出せない（恋を告げない）まま恋に苦しむ、と述べる。

古今集の「紫の色に出づ」 この標準的類型的な万葉歌の「紫の色に出づ」は、『古今和歌集』にも次のように継承されている。

恋しくは したにを思へ 紫の ねずりの衣 色に出づなゆめ
(古今集、十三―652、恋歌三、読み人知らず)

恋しいなら心の中だけで思いなさい、紫の根摺りの衣のように、人目につくようにしてはいけない、と述べている。ここでも、恋衣に用いた紫根染めの生産叙事から「紫の色に出づ」が発想されている。すなわち、「紫の根摺りの衣」は、「色に出づ」の有心の序詞である。

2 譬喩としての紫衣を「染む」・「着る」

妻訪いの現場

笠女郎、大伴宿禰家持に贈る歌三首（うち一首）
 ③ 託馬野に 生ふる紫草 衣に染め いまだ着ずして 色に出でにけり
 （三一三九五、譬喩歌）

笠女郎が託馬野（近江国の彦根、米原付近の野原、あるいは肥後国の託摩郡の野原）の特産物の紫根で恋衣を染めた（恋心を抱いた）ものの、恋人の家持が訪れないので恋衣を「着ずして」（恋が成就しないうちに）、「色に出でにけり」（恋心が態度に出てしまい、世間にも知られた）と嘆いている。すなわち、恋心を抱きながらも恋が成就しないまま恋心が態度に出てしまい、片恋が世間にも知られたという不都合を、「託馬野の紫草」で恋衣の紫衣を「染む」という生産過程は順調ながら、「着」ないまま「色に出でにけり」（色が鮮明に表に出てしまった）、と恋衣の習俗に重ねて述べている。

報われない恋の諸謔 確かに道理としては紫草で衣を染めると色が出るので、生産叙事としては上三句「託馬野に生ふる紫草衣に染め」は、五句の「色に出づ」に懸かっている。しかし、恋衣を「着る」ことで家持を迎えらるので、恋衣・染め衣の生産叙事は四句の「着る」にも懸かっている。したがってこの歌は、手段（染衣の生産過程）さ

え取れば目的（恋衣を「着」て恋が成就すること）を欠落しても「色に出づ」ことのおかしさを述べている。わざわざ「託馬野に生ふる紫草」を提示したのは、託馬野が紫根の名産地だからで、これで貴族社会の最高級の紫衣を作ったものの、それが恋衣にならず、あまつさえ片恋が世間に知れ、まるで報われない恋だった、と恋の展開と結果の落差を諧謔的に述べている。そのあり方は、東歌⑮と共通している。

譬喩としての「染む」・「着る」 四で述べたように、恋衣を「摺る」・「着る」という恋愛生活上の行為が、そのまま「恋心を抱く」ないしは「恋が成就すること」の譬喩・修辭になっていた。ここでは、「紫草」を衣に「染め」て「着」る行為が、恋心を抱き、恋が成就することを意味している。

紫の色に出づ また、託馬野の紫草を色衣・恋衣に用い、その際の紫根染めの生産叙事から、「色に出づ」は秘めた恋心が顔色・態度に出、さらに世間にも知られることの譬喩になっている。

七 源氏物語の紫

1 紫の「根」と「寝」

若紫の巻の紫の「根」と「寝」 『源氏物語』若紫の巻に、東歌⑮のように紫のネ（根・寝）を詠む恋歌が二例ある。以下の『源氏物語』の引用は、『源氏物語』（一九九八）による。

光源氏は、継母の藤壺を熱愛しながらも逢えないでいた時、藤壺に生き写しの少女（若紫）を見出した。少女は藤壺の姪で、彼女を「かの人の御かはり」（藤壺の身代わり）としたい、と深く思った。やがて機会を見つけて藤壺と狂おしい逢瀬があった後、「心のいとまなくおほし乱るる人の御あたり」に心をかけて、あながちなるゆかりも尋ねまほ

しきこころもまさり」(藤壺の縁の人を求めたい気持ちが募って)、源氏は次のように詠む。

手に摘みて いつしかも見む 紫の根に かよひける 野辺の
若草 (源語・若紫の巻、源氏)

紫(紫草)＝藤壺の「根」(血縁)につながる若草(若紫)を、すなわち紫(紫草)＝藤壺との「寝」につながる若草(若紫)を、自分の手で摘み取って早く我が物にしたい、と述べている。

やがて源氏は、密かに少女(若紫)を二条院に迎え取り、この少女に藤壺の面影を求め、次の歌を詠む。

ねは見ねど あはれとぞ思ふ 武蔵野の 露分けわぶる 草の
ゆかりを (源語・若紫の巻、源氏)

逢うのに苦勞する(露分けわぶる)草(紫草)＝藤壺の縁の人(若紫)が、まだ「寝」ていないけれども、すなわちよく染まる紫の「根」(素敵な恋人)か試していないけれども、愛しく思う、と述べている。

このように、紫根染めの「根」に「寝」を懸けているのは、東歌⑮と同じである。しかし、源氏が藤壺あるいは少女(若紫)と逢うとき、恋衣・紫衣を着ていたという妻訪いの現場が文脈に表れていない。すなわち、東歌⑮に詠まれたような恋衣・色衣の習俗は影を消し、形式的言語上だけのものになり、恋の色としての紫の概念化・抽象化が進んでいる。

武蔵野の紫草 右の二首は、いわれるように次の二首を踏まえている。『古今和歌六帖』の歌の引用は、『新編国歌大観 第二巻』(一九八四)による。

むらさきの 一本ゆゑに 武蔵野の 草はみながら あはれと
ぞ見る (古今集、十七ー867、雑歌上、読み人知らず)

恋衣・色衣を染め出す紫草(＝恋人)が一本でも武蔵野に生えていれば、その野原に生えている紫草以外の草木(恋人の縁の者)までが愛しく思える、と述べる。

しらねども むさしのといへば かこたれぬ よしやさこそは
むらさきのゆゑ (古今六帖、五ー3507、読み人知らず)

行ったことがないけれども、武蔵野と聞くと自然とつい恨み言である、それも仕方のないことだ、そこに生えている紫草ゆえなのだからと述べている。すなわち、「紫草」(＝恋人)のことで思い悩んでいるので、紫草の生えている「武蔵野」(恋人に関係した人・こと)を聞くといふ愚痴っぽくなってしまう、というのだろう(ただし、いささか坊主憎けりや袈裟まで憎いに近いところもある)。右の二首では、恋衣・色衣を染め出す紫草が知識として観念的に恋人の譬喩になっている。すなわち、武蔵野の紫草の根を色衣・恋衣に用いた習俗は、ここでも影を潜めている。

次の『後撰和歌集』の歌は「若紫」を若い恋人の譬喩とし、「紫の一本ゆゑに」(古今集、十七ー867)を踏まえている。以下の『後撰和歌集』の歌の引用は、『後撰和歌集』(一九九〇)による。

武蔵野は 袖ひつ許 分けしかど 若紫は たづねわびにき
(後撰集、十六ー1177、雑二、読み人知らず)

武蔵野の紫草の根を色衣・恋衣に用いた習俗は、ここでも影を潜め

ている。

後撰集の紫根染め 『後撰和歌集』には、次の歌のように恋衣にする紫根染めの根を詠む例もある。

まだきから 思ひ濃き色に 染めむとや 若紫の 根を尋ぬら
ん (後撰集、十八ー1277、雑四、読み人知らず)

相手の女がまだ若いうちから濃い思いに染めようとして男が若紫の根を探しているのか、と述べている。ここでは、紫根染めを恋衣に用いた習俗を下地にし、若紫を若い女性の譬喩にしている。片桐洋一(一九九〇、三八七頁)によると、「幼い女を早くから思いをこめて自分の色に染めあげようとしている男の存在が源氏物語の若紫の巻に先行している」。

2 色好み

風俗歌の「たたらめ」 『政事要略』に、風俗歌の「たたらめ」が伝わっている。以下の「風俗歌」の引用は、『古代歌謡集』(一九六八)による。

たたらめの花の如 かい練好むや 實に紫の色好むや
(風俗歌一43、たたらめ)

「掻練」は練って糊を落として柔らかにした絹布で、多く紅色をしている。『古代歌謡集』の「たたらめ」の注によると、「植物名。「たたら女」とよむのは当たらない。いまの何にあたるのか明らかでないけれども、大同類聚方の細辛を「多多良女」とよみ、延喜式にも眼薬として

「多多良女花搗」とある」。すなわち、「細辛」は「多多良女」であり、「花搗」するもので、眼薬になるという。

「たたらめの花の如掻練」は紅衣 『源氏物語』末摘花の巻は、この風俗歌の「たたらめ」を踏まえて姫君・末摘花の「鼻」が末摘花(紅花)の「花」の色であることを笑いのめしている。この笑いのめしには、そこに至る思い込みの経緯がある。そもそも、若紫の巻で源氏が理想の恋人「若紫」を見出したので、これに続く末摘花の巻でも源氏が理想の恋人を見出すだろう、と作者は読者に予想させている。その予想が可能なのは、「紫草」から染め出される「紫衣」ならびに「末摘花(紅花)」から染め出される「紅衣」が、恋衣として代表的なものであり、若紫の巻では染料の「紫草」から「若紫」という理想の女人が造形されていたので、同様に末摘花の巻でも染料の「末摘花」から「末摘花」という理想の姫君が造形されるだろう、と考えたからである。しかし、柳の下に二匹目の泥鰌はおらず、恋が進展するうちに末摘花の姫君が恋の対象外であると判明し、光源氏も読者も当初の期待を著しく裏切られ、風俗歌の「たたらめ」を踏まえて姫君・末摘花の「鼻」が末摘花(紅花)の「花」の色だ、と破天荒な落ちに至っている。

こうしてみると、風俗歌の「たたらめ」の「紫の色」は恋衣の「紫衣」なので、「たたらめの花の如掻練」とは恋衣の「紅衣」(紅花Ⅱ末摘花で染めた衣)のことではなからうか。とすれば、「多多良女」(細辛)は紅花だ、ということになる。紅の製法の一工程として紅花を白で搗くことがあるので、「多多良女花搗」とも合致している。また、紅花の薬効は眼薬とあるものの、その薬効は一つに止まらず、『日本古代の色彩と染』(一九七五、一二四頁)によると、悪血を取り去り、増血剤になり、婦人病、のほせ、頭痛に効くところがある。草木染めのほとんどは、何らかの薬効を持っている。紫根染めの紫根の薬効については、一〇で後述する。

色好みのプロトタイプ また、「選り好み」という用例が示すように、

「好む」は良いものを選択することである。すると風俗歌の「たたらめ」の歌意は、恋衣として「紅衣」と「紫衣」のいずれを選ぶか、ということになる。「紫の衣」と「紅衣」は甲乙つけがたい逸品なので、その選択はむずかしい。この風俗歌は、二つの恋衣のうちどれを着て妻訪いしようかと迷う伊達男のおしゃれを歌っている。ここでは、妻訪いの現場が述べられている。そのあり方は⑩恋衣をたくさん着込んでいた青春時代の竹取の翁とは違い、恋衣を選択している。

しかし、この風俗歌の真意は別にある。それは「紅衣」と「紫衣」がいずれも劣らぬ理想的な女人を意味し、そのどちらが本命（本妻）なのか、ということではなからうか。この「色男」は二股をかける愛の狩人で、周囲から野次られているという趣向だろう。

このように、「紫の一本ゆゑに」（古今集、十七・867）の恋衣・色衣を染め出す「紫（紫草）」が、愛しい恋人の比喩になっているように、風俗歌の「たたらめ」の恋衣の「たたらめの花の如掻練」と「紫の色」もまた、愛しい恋人の譬喩になっている。

前述したようにこの風俗歌の「たたらめ」の真意は『源氏物語』の作者にも読者にもわかっており、だからこそ紫衣から理想的な若紫像が造形されているので、「たたらめの花の如掻練」（紅衣・末摘花染め）からも理想的な末摘花像が造形される、と読者は予想した。

光源氏の色好み 風俗歌の「たたらめ」の男は、紫の色（紫の女）と「たたらめの花の如掻練」（末摘花の女）のいずれを選ぶかと周囲からいわれている。この点、『源氏物語』は「紫（紫衣）」を若紫のシンボルカラー、「末摘花（紅衣）」を姫君・末摘花のシンボルカラーにし、多数いる女人のなかから理想的な女人に「紫」や「末摘花」などを選択し、ハーレム（二条院と六条院）を作っている。風俗歌の「たたらめ」における男のあり方（二者択一）が「色好み」の原型・プロトタイプだ

と考えられるものの、⑩青春時代の竹取の翁のように複数の見事な恋衣を着る（優れた複数の女性を恋人・妻にする）色好みもあり、光源氏の色好みはその究極の姿だろう。

八 妻訪いの習俗からの発想

妻訪いの習俗からの発想 以上、四であげた花（葉）摺り衣を詠む多くの歌、斑の衣・韓（唐）衣を詠む歌、五・七であげた紫を詠む五首（⑩・⑪・⑫・⑬・⑭）を総合してみると、これらの歌は恋衣・紫衣を纏って妻訪いする（恋人・夫を迎える）習俗・場から発想されている。すなわちこれらの歌は、男女が相逢っている恋の現場、あるいはその周辺の叙述であり、その恋衣としての紫衣から恋詞の「紫の色に出づ」が発想され、また「摺る」「染む」「着る」などが「恋心を抱く」「恋が成就する」の譬喩になり、さらに恋人賛美の「垣津幡丹つらふ妹（君）」などを生んでいる。

色好み また、恋衣の紫根染めを背景にした妻訪いをめぐる恋歌から、『源氏物語』若紫の巻の若紫像が造形されている。また、恋衣として紅衣と紫衣のいずれを着て妻訪うかと述べる風俗歌の「たたらめ」の本旨は、どの女を妻として選択するかということで、ここに「色好み」のプロトタイプが示されている。そして、光源氏の色好みはその究極の姿である。

九 歌垣の紫衣

1 歌垣の紫衣

紫染めによる口説き 海石榴市（奈良県桜井市）で執り行われた歌垣

で、次の問答歌が交わされている。

⑭紫は 灰さすものそ 海石榴市の 八十の衢に 逢へる児や誰
(十二-3101、問答歌)

たちねの 母が呼ぶ名を 申さめど 道行き人を 誰と知り
てか
(十二-3102、問答歌)

⑭の上二句は、色の褪せるのを防ぐとともに色を鮮やかにするため海石榴(椿)の灰を入れることから、海石榴に懸かる序詞・修辞になっている。すなわち上三句は、紫を染めるとき媒染として海石榴の灰を「指す」(注ぐの意)と色が鮮やかに出る、という紫染めの生産叙事になっている。また、「紫」を女に「灰」を男に譬え、女は男に逢うものだという譬喩にもなっている。「ものそ」には断定の口調があり、強い口説きの調子がある。それで、これに次いで下の句で女の名を尋ね、求愛している。

「紫の色に出づ」の言い換え しかし、右の解釈と結論が同じながら、今まで挙げた「紫の色に出づ」の類句、例えば③「紫草衣に染めいまだ着ずして色に出でにけり」と⑪「紫の我が下紐の色に出でず恋ひかも瘦せむ」から類推して、⑭の上二句の本来の標準的な表現は「紫の色に出づべし」だ、と考えられる。すなわち、紫は海石榴の灰を入れると鮮やかな色が出るわけで、この紫根染めの生産過程に必要な「海石榴」と地名の「海石榴市」との語呂合わせに縁をえて、恋情表現の常套句「紫の色に出づ」+当然の「べし」(秘めた恋心を態度に出すものぞの意)が、「紫は灰指すものそ」という気の利いた口説き文句・愛の殺し文句に作り変えられたろう。

言われるようにこの問歌は、海石榴市の歌垣で男が女に向かつて

「恋心は鮮明に態度に出すものぞ」と強引に口説いたものである。そして、女が答歌(十二-3102)でこれを撥ねつけている。一見するとこの問答歌は一对の男女の掛け合いのように見えるものの、その実態は歌垣で男組と女組が歌を掛け合った典型的な恋歌、テーマソングだったろう。

歌垣の紫衣 海石榴市の歌垣に恋衣の紫染めを持ち出したのは、紫根染めに必要な「海石榴」と地名の「海石榴市」の語呂合わせからだけではなからう。歌垣の場で恋衣として紫衣などを毎年着続け、その恋衣の準備段階として紫を染め出す生産過程を経験し、熟知していたからでもある。このように、歌垣の恋の場に紫根染めを着た男女がいたことを想定することで、上二句の「紫は灰指すものそ」の発想が理解できる。

歌垣で結んだ紐 次の歌は、海石榴市の歌垣を思い出して詠んでいる。

海石榴市の 八十の衢に 立ち平し 結びし紐を 解かまく惜しも
(十二-2951、正に心緒を述ぶる)

海石榴市の歌垣で地を踏み平し、結んだ紐を今解くのは惜しい、と述べている。ここの「結びし紐」は、歌垣で愛を交わした相手が結んだものである。今は別の相手と交際し、その紐を解こうとしている。

この「紐」はどのようなものだろうか。六で述べたように、恋衣の⑪「紫の我が下紐」や⑩「紫の帯の結び」が恋の現場にあるので、この歌垣で愛を込めて結んだ「紐」もまた、紫染めなどの恋衣だったろう。

歌垣の「御帯の倭文服」 海石榴市の歌垣は、武烈前紀で影媛をめぐる鮪の臣と太子(後の武烈天皇)の恋の鞘当ての舞台になっている。そこで、太子が影媛に求愛の歌をうたうと、鮪の臣が愛人の影媛

に代わって次の歌を返し、太子を拒絶している。

大君の 御帯の倭文服 結び垂れ 誰やし人も 相思はなくに

(紀歌謡93、武烈前紀)

大君(太子)が御帯の倭文服の布を結び垂れている、そのタレではないが、誰かこれという特定の人のことを相思っていない、と述べている。この歌を鮎が影媛に代わって述べているので、あの方(鮎の臣)以外の誰かこれという人のことを相思っていない、と影媛が述べた格好になる。

「倭文服」は、日本古来の簡単な模様のある織物である。上三句は「誰」を導く序詞になっているのは、単なる語呂合わせでなく、実際に「大君(太子)」が歌垣で恋衣の「御帯の倭文服を結び垂れ」ていたところから「誰」を導いているだろう。すなわち、上三句は「誰」を導く有心の序詞である。

「大君の御帯の倭文服」(紀歌謡93)の類歌として、次の歌がある。

古の 倭文機帯を 結び垂れ 誰といふ人も 君にはまさじ

一書の歌に曰く、「古の 狭織の帯を 結び垂れ 誰しの人も 君にはまさじ」

(十一—2628、物に寄せて思ひを陳ぶる)

古の倭文機帯(狭織の帯)を結び垂れている、そのタレではないが、誰という人もあなたには及ばないだろう、と述べている。「君」の纏っている「倭文機帯(狭織の帯)」も、恋衣の一種である。この歌は(紀歌謡93)の類歌であるものの、その主題は正反対で、男の愛を受け容れている。

このように、恋の現場を示すほぼ同じ上三句を用いて、相手を拒絶もすれば、受け容れもしている。すなわち、この有心の序詞は応用の効く典型的な恋詞になっている。こうしてみると、「大君の御帯の倭文服」(紀歌謡93)と「古の倭文機帯(狭織の帯)」(十一—2628)は、歌垣の歌としても妻訪いの歌としても通用するものである。(十一—2628)に異伝・バリエーションがあるのは、この歌がとても愛唱されていたことを示しているよう。

2 歌垣の小忌衣

歌垣の小忌衣 『続日本紀』によると、称徳天皇の宝亀元年(七七〇)三月辛卯の日(二八日)に歌垣が執り行われ、それに参加した男女の装束と歌謡は次のとおりだった。この条の引用は、『古代歌謡集』(一九六八)による。

其の服は並びに青摺の細布の衣を着、紅の長紐を垂れ、男女相並びて、行を分けて徐ろに進む。歌ひて曰はく、
乙女らに 男立ち添ひ 踏み平らす 西の都は 萬代の宮

(続日本紀歌謡6、続日本紀・宝亀元年三月の条)

この歌垣は、民間の歌垣に中国の踏歌が合流して宮廷化したものである。この歌垣でも、海石榴市の歌垣と同様に「紐」を垂れている。祭場の「西の都」(河内の由義の宮)で「踏み平らす」が「海石榴市の八十の衢に立ち平し」(十二—2951)に共通し、歌垣は男女が並んで行列を組んで大地を踏む要素を持っていた。歌垣は元々神事なので、「紅の長紐を垂れ」た「青摺の衣」を小忌衣としていた。この「紅の紐」をつけた「青摺衣」が小忌衣であることは、例えば『延喜式』縫殿

寮の条に新嘗祭の小斎諸司の服の材料として「青摺布衫三百十二領、緋紐料四丈、質布六端一丈二尺、山藍五十四圓半、模飯料二斗四升八勺。」と記されていることからわかる。質布は「さよみぬの」と読み、細い麻糸で織ったという。「青摺衣」の料は山藍であり、「模飯料」はこれを型摺りするための飯の料である。

鳥名子舞の小忌衣 また、「皇太神宮年中行事」の「六月十七日祭使參宮之間鳥名子舞歌」に、小忌衣の「紫帯」が次のように述べられている。この歌謡の引用は、『古代歌謡集』（一九六八）による。

いよとぞ言ふ 君が代は 千代とぞ言ふ 千代とぞ言ふ
紫帯をぞ垂れ いざや遊ばむ (雑歌一50、皇太神宮年中行事)

『古代歌謡集』の「紫の帯」の注によると、「鳥名子たちが紫の帯を結び垂れたものらしい。鳥名子の衣裳が青摺りのものであったことは太神宮式に見えるけれど、帯のことはわからない。しかし、青摺りと配合からいって、紫の帯は自然である」。すなわち、「紫衣」は「青摺衣」の延長線上にあり、小忌衣だという。

小忌衣・恋衣としての紫衣 こうしてみると、「海石榴市」の市神の祭りとして定期的に執り行われる春秋の歌垣で参加者が着ただろう恋衣・紫根染めは、「青摺衣」と同じ小忌衣、あるいはその小忌衣の後身だったとわかる。

一〇 薬狩りの紫衣

1 薬狩りの紫衣

宮廷の薬狩りの祭日と服色令 天智天皇七年（六六八）五月五日に

蒲生野（現在の八幡、安土、八日市付近の野原）で、近江朝挙げて薬狩りを執り行っている。次の①・②はその時の贈答歌である。

天皇、蒲生野に遊獵する時に、額田王の作る歌

① あかねさす 紫野行き 標野行き 野守は見ずや 君が袖振る
(二一20、雑歌)

皇太子の答ふる御歌 明日香宮に天の下治めたまふ天皇、謚を天武天皇といふ

② 紫の にはへる妹を 憎くあらば 人妻ゆゑに 我恋ひめやも
紀に曰く、「天皇の七年丁卯の夏五月五日、蒲生野に縦獵す。時に、大皇弟・諸王・内臣また群臣、皆悉従ふ」といふ。

朝廷の薬狩りは五月五日に固定しており、推古紀十九年（六一二）・二十年（六一二）・二十二年（六一四）の五月五日に、菟田野と羽田などで薬狩りが行われている。そして、参加する「諸臣の服の色、皆冠の色に随ふ」とある。この近江朝の薬狩りもまた、天智天皇三年（六六四）に改定された服色令に従って行われたらう。

民間の薬狩りの祭日と「垣津幡」の狩衣 次の二首は、薬狩りを詠んでいる。

乞食者が詠ふ二首（うち一首）

平群の山に 四月と 五月の間に 薬狩 仕ふる時に
(十六一3885、鹿のために痛みを述べて作る)

十六年四月五日に、独り平城の故宅に居りて作る歌六首
(うち一首)

かきつはた 衣に摺り付け ますらをの 着襲ひ狩する 月は
来にけり (十七—3921、大伴家持)

平群の山では四月と五月の間に鹿狩りなどの葉狩りが行われ、大伴家持の歌は四月五日に作られ、民間の葉狩りを詠んでいる、と考えられる。こうしてみると、民間の葉狩りの祭日は四月と五月の間に設定されている。

その葉狩りは共同体で執り行われる年中行事で、一定の祭式を持っていたらう。その次第は今となつては容易に復原しがたいものの、以下に説くように昼間の男女別に分かれた葉狩りと夜の男女和合の集いの二部構成だった、とみられる。

そしてこの歌で注目すべきは、狩人(丈夫)は紫色を呈する「垣津幡」の花摺りの狩衣を「着襲ひ」していることである。小学館『万葉集四』の頭注は、推古紀十九年五月五日の葉狩りの条から「キソフも日常の衣服に何かを付加したのではなからうか」と解している。恐らくそのとおりで、狩人は日常の衣服の上に紫色を呈する「垣津幡」の花摺りの狩衣を着重ねた、と想定される。

これに対して、女たちも葉用になる植物の採集、葉狩りをしている。そして、その際にも日常の衣服の上に「垣津幡」の紫の衣を着重ねていたらう。なぜなら、年中行事に参加するかぎり、男女ともに晴の小忌衣を着用しなければならないからである。葉狩りにおいて男たちの小忌衣・狩衣だけが「垣津幡」の紫染めだったとは、到底考えがたい。そうだとすると、一般の民間の葉狩りは祭服・小忌衣としての「垣津幡」摺りなどの紫衣で満たされていたはずである。

宮廷の葉狩りと紫衣 当然のことながら、宮廷の葉狩りは民間の葉

狩りでない。しかし、民間の葉狩りを土台にしているので、その次第も基本的に昼間の男女別に分かれた葉狩りと夜の男女和合の集い・宴の二部構成だったとみられる。

そして、宮廷挙げての葉狩りの男たちは、定められた服色の上に紫の狩衣を着重ねていたのではなからうか。このように考えるのは、いかに王権が強大であっても、葉狩りにおいては神の論理が俗的世界の論理に優先しているからである。すなわち祭祀の世界では、小忌衣を着用する定めが、俗なる権力の定めた服色令に優先している。以上は、鹿などから薬用(強壮剤)になる袋角(生えはじめの角)などを入手する、いわゆる男たちの葉狩りである。

これに対して、女たちも葉狩りをしている。それは薬用などになる紫根(葉草)を狩ること、紫根の薬効は松田修(一九七〇、二一五・五三二頁)によると切り傷・火傷にあり、八田亮三(一九七五、八五頁)によると解熱・解毒・腫瘍・火傷・凍傷・湿疹・痔疾にある。そしてその際にも、女たちは小忌衣の紫衣を着重ねていたはずである。

2 男組の鳥獸狩りと女組の葉草狩り

男組の鳥獸狩りと女組の葉草狩り 鴨狩り、獸狩り、茸狩り、桜狩り、紅葉狩りなどの用例からわかるように、「狩り」は本来野生のものを入手することで、葉狩りもその一つである。天智天皇七年(六六八)の葉狩りは、男たちによる鳥獸狩りと女たちによる葉草(紫根)狩りという分業で構成されていたらう。

男たちの狩りは走り回る鹿や飛ぶ鳥などを狩るもので、勇壮で行動的だった。これに対して、女たちが紫根などの葉草狩りをする「紫野」は外部の者の侵入を禁じる「標野」で、見張りの「野守」まで置いている。その意味で「禁断の園」で、静的だった。

しかし、葉狩りは五月の野外での作業なので解放感に溢れ、鳥獸を追いかける男・「君」が勢い余って（あるいは勢い余ったように装って）「紫野」に近づき、好意を抱く女官に紫の「袖振る」ことはありえたらう。そうになると、その男の振った紫の袖とそれを受け止める女の着ていた紫衣は、見方を変えたと恋衣に見立てられることになる。紫衣を着て男と女に分かれて行う葉狩りは、そのようなロマンへの期待感に満ちていたはずである。

宴の座興の歌 日中の葉狩りに次いで、夜は男女和合の集い・饗宴が執り行われたらう。伊藤博（一九九五、八八―九四頁）が説くように、天智天皇を上座に据えた夜の饗宴で、そのようなロマンへの高揚感を感じた額田王は自分を女組の代表に見立て、日中の葉狩りである男との間に愛のサインが交わされたというロマンを①で演じて見せ、皇子はそれを②で見事に受け止めて自分を男組の一人に見立て、堂々と恋人役を演じきっている。いわれるように、そのためにこの二首は主に恋歌を収録する「相聞」ではなく、宮廷の公的な歌を収録する「雑歌」に部立てされている。

なお、①②を葉狩りの後宴の座興の歌と見る説の嚆矢は、折口信夫（一九七六、四五―一頁）であり、これが山本健吉・池田弥三郎『萬葉百話』（一九七九、三三―三六頁）に継承され、最近では桜井満（一九九五、一四五―一六一頁）に継承されている。

紫衣から発想された「紫の丹穂へる妹」 皇子が②で額田王を「紫の丹穂へる妹」と恋人扱いはしたの、恋衣としての紫衣に基づく発想であって、この表現は四であげた「垣津幡丹つらふ妹・君」（十一―1986、十一―2521）などと同じ表現である。このように、「紫の丹穂へる妹」という表現は、野山の鳥獸狩りや「紫野」・「標野」の葉草（紫根狩りに用いる晴衣・小忌衣・紫衣が恋衣に見立てられたところに基づいている。

紫衣から発想された「垣津幡丹穂へる妹・君」 こうしてみると、「垣津幡丹つらふ妹・君」（十一―1986、十一―2521）も、晴衣・小忌衣の垣津幡摺りに彩られた葉狩りにかかわる恋歌で、恋人賛美の類句も葉狩りの小忌衣の垣津幡摺りを恋衣に見立てたところに基づいているのではなからうか。

我のみや かく恋すらむ かきつはた につらふ妹は いかに
あるらむ （十一―1986、夏の相聞、草に寄する）

かきつはた につらふ君を ゆくりなく 思ひ出でつつ 嘆き
つるかも （十一―2521、正に心緒を述ぶる）

一首目は葉狩りの男女の集いで「垣津幡丹つらふ妹」に求愛した男の歌、二首目は葉狩りの男女の集いで愛を語り合った「垣津幡丹つらふ君」を後日思い出して思慕した女の歌とも解せる。

右のようにみえてみると、宮廷の葉狩りで歌われた「紫の丹穂へる妹」は、民間の葉狩りの場から発想された「垣津幡丹つらふ妹・君」の延長線上にあるといえよう。「紫の丹穂へる妹」は、在来の民俗文化に根差した表現であり、服色令によって高貴な者のみに許された貴族的な紫衣に根差した表現でないことになる。

紫衣から発想された「茜注す紫」 こうしてみえてみると、①「茜さす紫」の懸かり方も、葉狩りの紫衣から発想されている、と考えられる。紫衣の色相をより鮮やかにするために、茜草の赤い根から採った染料（赤色）を紫根の染料に注ぐ（注す）ことがある。すなわち、この紫衣の生産過程を踏まえた表現が「茜注す紫」だ、と考えられる。とする、①「茜さす紫」を受けた②「紫の丹穂へる妹」は「茜注す紫の丹穂へる妹」ともいえ、最上級の恋人・女人の義にならう。

さらに、「茜さす」が枕詞として日・昼・月・君に懸かるあり方も、この染色の生産叙事の延長線上にあり、茜によって色や光が鮮やかに発するところにある。次の「茜注す君」の唯一の例は、とくに紫の生産を踏まえていて特徴的である。

夫君に恋ふる歌一首

飯食めど うまくもあらず 行き行けど 安くもあらず あかねさす 君が心し 忘れかねつも (十六—3857)

妻が夫を激しく恋慕して賛美した「茜注す君」は、紫根染めに茜草から採った染料を注すと紫の恋衣が鮮やかな色・光を発するところに基づいていよう。この恋人賛美の「茜注す君」は紫衣から発想された「紫の丹穂へる妹」・「垣津幡丹穂へる妹・君」と同類で、「茜注す紫の丹穂へる君」に等しい。

3 葉狩りと成人戒

大国主の神の受難 ところで、狩りに成人戒が付随し、成人戒を挙げた若者は直ちに恋愛を許されている。それは、成女戒を挙げた娘が直ちに恋愛を許されていることと同じである（二一で後述）。

右のことを示す例が、神代記の大国主の神の受難の条にある。以下の『古事記』の引用は、『古事記』（二九七九）による。

大穴牟遲の神（大国主の神の別名）は兄の八十神たちに赤い猪を狩るように命じられ、その実、猪に似せた焼石と格闘させられて焼け死んだ。その後、貝の女神（蛭貝比売と蛤貝比売）の薬によって生き返り、「麗しき壮夫」になっている。西宮一民（二九七九、六一頁）によると、その薬とは赤貝の殻の粉を蛤の出す汁で溶いて母乳状にした液体

で、火傷に塗るものである。

右の大穴牟遲の神が八十神たちによる焼石の試練で仮死状態になりながら蘇生した伝承は、出雲地方の成人戒に基づいた伝承だ、と考えられる。三品彰英（一九七四、二二六頁）によると、「若者の受けるこの種の試練・苦行は、未開社会、または古代社会では、程度の差はあるけれども、もつとも一般的に行なわれていた」ものだった。すなわち、この成人戒は子供として死に、立派な大人（麗しき壮夫）として復活することである。伝承では復活した大穴牟遲の神は直ちに性を行使していないものの、大穴牟遲の神はこの後、須佐之男の命のいる根の国に行つて同じく狩りなどの試練を改めて受け、神の娘・須勢理毗売と結婚しているので、成人戒の後に性を行使しているといえる。そして、現に儀礼としても成人戒の後に若者は性を行使している。

出雲国の葉狩り 大国主の神の受難の条が夏の葉狩りに付随した成人戒の神話化だとまでは特定できないものの、仮死状態になった若者が女神の薬によって蘇生したというのは、葉狩りを示唆しているようである。

これを今少し想像を逞しくして、出雲国の葉狩りのあり方を想定してみる。成人戒を受ける青年を含め男たちの鳥獸狩りは常に危険を伴い、怪我が絶えなかつたろう。そして、その傷を癒すときに女たちの薬草狩りで得た薬がとくに歓迎されたのではなからうか。女たちの準備する薬として、出雲地方では薬草の他に火傷の特効薬として前述の海貝もあつたのではなからうか。この女たちの作る薬の効用を保証するのが、蛭貝比売と蛤貝比売の女神だった、と考えられる。したがって、女組に祭神がいるとすると、それはこの二柱の女神だろう。また、須佐之男の命の娘・須勢理毗売は愛人の大穴牟遲神を援助しながらその身を案じているので、薬草狩りにおける女性の役割が投影されているよう。

これに対して、鳥獣狩りをする男組の祭神は誰だろうか。「八十神」たちは、成人戒で新入りの青年に試練を課す先輩たちに相当するにすぎない。この点、現世での成人戒を終えた大穴牟遲の神が「根の国」へ行き、改めて須佐之男の命から狩りなどの試練を受け、その苦難を克服して将来を祝福されているので、男組の祭神はこの男神・須佐之男の命だろう。

いづれ大國主の神の受難の条から、狩り・成人戒・恋愛の三者に密接な関係があるとわかる。

伊勢物語の初冠・狩り・恋愛・紫衣 『伊勢物語』初段は、初冠

(成人戒)・紫の狩衣を着た狩り・恋愛・紫衣の恋歌のモチーフを兼ね備えている。その梗概は次のとおりである。昔男が初冠(元服、成人式)を挙げ、自分の領地に狩りに行った。その時、その里に住む美しい姉妹を垣間見て恋をし、男の着ていた「紫の信夫摺りの狩衣」の裾を切つて、大人ぶつて(老いづきて)次の歌を書いて贈つた。

春日野の 若紫の すり衣 しんのぶのみだれ かぎり知られず

(勢語、初段)

そして、作者はこの歌を四であげた河原左大臣・源融の「信夫振摺り」の歌(古今集、十四・724)の「心ばへ」だ、と評している。

この条の狩衣は「若紫の摺り衣」なので、ここでの狩りは夏の葉狩りだったろう。作者は姉妹が紫衣を着て薬草(紫根や菖蒲など)を採取しているとも、歌を返したとも、記さないものの、本来ならば姉妹は紫衣を着て薬草を採取し、それから成人式を挙げて葉狩りに来た若者の恋の対象になり、返歌もしたろう。このあり方は、狩り(葉狩り)に成人戒が付随し、同時に恋愛を許され、狩衣・小忌衣の紫衣がそのまま恋衣にもなりえたことを示していよう。『伊勢物語』の作者が昔

男の「紫の信夫摺りの狩衣」を「信夫振摺り」の歌の「心ばへ」だと評したのは、狩衣の紫衣を恋衣だと認めたからである。このように、葉狩りには成人になったばかりの若々しい男たちの恋の要素が交じっていた。したがって、『伊勢物語』は昔男のイタセクスアリスを主体にしているの、昔男の愛のはじまり(初段)が自由恋愛を許される成人戒、すなわち葉狩りを場にして当然である。

『伊勢物語』初段は初冠(元服、成人式)を挙げてから狩りに行き、恋歌を贈つて求愛しているように記している。しかし、本来は男女の集いの冒頭で鳥獣狩りの試練に合格して「成人」として認められ、それから先輩たちに立ち交じって大人ぶつて(老いづきて)女性に恋歌を贈つて求愛した、と考えられる。

このように、夏の葉狩りで鳥獣を狩る男組には、成人戒を受ける若者も加わり、紫根狩りをする女・娘たちに精いっぱい紫の狩衣を振つて「紫の丹穂へる妹」・「垣津幡丹つらふ妹」に愛を告白し、女・「妹」たちも「垣津幡丹つらふ君」の愛に応える(あるいは断る)のは、毎年繰り返された情景だったろう。

こうしてみると、『伊勢物語』で男がその里に住む姉妹を「垣間見」て恋をしたというのは、王朝文学らしい文飾だろう。

なお、成人戒と対応して葉狩りに成女戒も付随しているので、成女になったばかりの若々しい娘たちの恋の要素も交じっていた(一一で後述)。

元服の紫の初元結 平安時代の元服では、元服する若者が「濃紫の初元結」をしている。例えば、『源氏物語』桐壺の巻で光源氏が元服する時、光源氏は「濃紫の初元結」をしており、次のように父の桐壺帝と舅の左大臣の間で歌が交わされる。

いときなき はつもとゆひに 長き世を 契る心は 結びこめ

つや (源語・桐壺の巻、桐壺帝)

結びつる 心も深き もとゆひに 濃きむらさきの 色しあせ
ずは (源語・桐壺の巻、左大臣)

桐壺帝の歌は、幼い冠者の初めての元結の組み紐に、あなたの姫(葵の上)との末長い仲を契る気持ちを結びこめたか、と問うている。これに対する左大臣の歌は、深い心をこめて結んだ元結に、その濃い紫の色(光源氏の濃やかな愛情)さえ褪せなければ、と答えている。そして、その夜、副臥の妻(葵の上)を妻訪うことになっている。これに対して副臥の妻も、例えば五であげた「君来ずは」(古今集、十四・693)のように「濃紫」の「元結」を結って新夫を迎えたらう。こうしてみると、この元服の「濃紫の初元結」は恋衣の類だとわかる。このように、元服・濃紫の初元結・妻訪いが並ぶと、この元服のあり方は葉狩りにおける成人戒の記憶を揺曳している、と考えるべきだろう。

なお、元服する者の結ぶ「濃紫の初元結」は、やがて服色令の紫に傾斜して将来の出世をも祝福するようになる(一四で後述)。

4 葉狩りと恋愛

伊勢物語・大和物語の葉狩りと恋愛 『伊勢物語』五十二段と『大和物語』百六十四段は、葉狩りが鳥獣狩りをする男組と葉草狩りをする女組に分かれ、両者が交流していることを明示している。その梗概は次のとおりである。昔男のもとに女から粽が贈られた。そこで男は返しに雉に付けて、次の歌を贈った。

菖蒲刈り 君は沼にぞ まどひける 我は野に出でて かるぞ
わびしき (勢語、五十二段)

『伊勢物語』と『大和物語』は右の交流が五月五日のことだと明記していないものの、同一伝承を伝える『業平集』は五月五日と明記している。この五月五日は葉狩りの日で、女は沼に行つて菖蒲を刈り、男は野に行つて雉などを狩っている。菖蒲も雉も葉であり、共に野生のものをカル(狩る・刈る)ものだった。そして、この男の歌をみると、狩りの場でこの女との出会いを期待していたとわかる。ここでは一対の男女の葉狩りにおける交情のように見えるものの、これは葉狩りに参加する男女全体が抱いた期待だったろう。このような期待を抱けたのは、葉狩りに成人男女の集う場が伴っていたからである。

粽は端午の節供の儀礼食で、葉草の菖蒲や茅などで巻くものである。女はその菖蒲を巻いた粽を、後日男に贈っている。この女の贈ってきた菖蒲の粽「葉」に対して、男は野原の雉「葉」を返している。葉狩りの晴の日に叶わなかった出会いを、葉の交換にこっそり叶えようとしている。そのあり方は、葉狩りで語り合った相手との再会を願う「垣津幡丹つらふ君」(十一・12521)と似ている。

右の物語は葉狩りの後日譚に終始しているものの、このような男組と女組の恋のやり取りは葉狩りの場が中心だったろう。そして、その日に男組と女組の葉が交換されたはずである。例えば、大穴牟遲の神のように死ぬほどでないまでも、狩猟でそれなりに傷ついた男性の体を癒す時には、女組の贈った葉(葉草、粽など)がとくに歓迎され、疲れた女の体に精をつける時には、男組の贈った葉・鳥獣の肉がとくに歓迎されたらう。こうしてみると、葉狩りは葉の採取のみならずその調査・調理も行われ、当然饗宴になったはずである。このような性別による集団の葉の交換の他に、個人的に葉の交換も行われ、それが愛

の告白ともなったろう。この個人的な葉の交換が後日に揺曳し、『伊勢物語』五十二段・『大和物語』百六十四段の話しになる。こうしてみると、男女が私的に交換した葉(物語では粽と雉)は、愛の印しになり、婚約の印しにもなった。

この歌物語の二人の登場人物は小忌衣・狩衣の紫衣を着ていたと記されていないものの、紫衣を着ていたはずである。歌物語は関心のあつた話題に焦点を絞る傾向が強いので、話題になっていない紫衣が文面から削ぎ落とされただけだろう。

歌垣と同類の和合の場 こうしてみると、この紫衣に満ちた夏の葉狩りは、⑭からわかるように同じく紫衣を着ていた海石榴市の春秋の歌垣などに類する男女和合の場だったことになる。

次の長歌は、その歌垣の具体的な状況を如実に示している。

筑波嶺に登りて嬬歌を為る日に作る歌一首

鷺の住む 筑波の山の 裳羽服津の その津の上に 率ひて
娘子壮士の 行き集ひ かがふ嬬歌に 人妻に 我も交はら
む 我が妻に 人も言問へ この山を うしはく神の 昔より
禁めぬ行事ぞ 今日のみは めくしもな見そ 事も咎むな

(九一七五九、高橋連虫麻呂の歌集の中に出づ)

歌垣は神祭り・国見に付随しているもので、その集団の信じる神(筑波山の神)が祭場に來臨し、その集団の最高神女が「一夜妻」として接待している、と考えられる。そして、参加者もその神と神女の分身として歌を交わし、夜に氣に入つた相手と愛を語り合っている。この日に限って日常の規範が取り払われ、相手が「人妻」であっても「神の昔より禁めぬ」ことだった。

『常陸国風土記』によると、筑波山の歌垣で次の歌謡が歌われてい

る。以下の風土記歌謡の引用は、『古代歌謡集』(一九六八)による。

筑波峰に 廬りて 妻なしに 我が寝む夜ろは 早も明けぬかも
(風土記歌謡3)

これは、歌垣の夜の男女和合の場で一夜の妻にあぶれた男の歌の体裁をとっている。しかし、『古代歌謡論』(一九七一、一六七・一六八頁)によると、このような体験をした男(個人)が嘆いているのではなく、恋の不幸のあほらしさを歌うものである。すなわち、「じつはすべての男女が結びついてるか、結びつく運命にあるからこそ、こうした恋の不幸が笑いの素材にされうるし、またされやすい」。だからこそ、風土記に記すように「筑波峰の會に娉の財を得ざれば兒女とせず」ということになる。

そして、葉狩りも神祭りの形態をとるので、神の名のもとに男女が集い、日常の規範を破る和合が期待されたものではなからうか。すなわち、葉狩りの男女和合の場は、奔放な恋を歌い、語れる雰囲気を持っていたらう。こうしてみると、葉狩りで大海人皇子が額田王に対して②「憎くあらば人妻ゆゑに我恋ひめやも」と歌つたのも、決して特異な表現でないことになる。そして、葉狩りで個人的に交換された葉(粽や雉など)は、歌垣における「娉の財」に相当しているともわかる。

葉狩りの祭祀世界 葉狩りも神祭りなので、神が來臨している。そして、來臨する神とその神を「一夜妻」として接待する神の妻は、葉狩りにおける男組の代表者と女組の代表者として具現化されているだろう。今の宮廷の葉狩りの場合は、天智天皇が男組の代表者、額田王が女組の代表者であり、天智天皇の「一夜妻」が額田王であるという構図になる。そして、その他の参加者がその分身として氣に入つた相手と愛を語り合うことになる。少なくとも、そのような祭祀世界が幻想

されているだろう。

そうであればこそ、額田王は①天皇以外の「君」が禁断の園の「紫野行き標野行き」をするのみならず、「袖振る」ことまでして愛を告げるので、「野守りは見ずや」（今宵の一夜妻の夫・天智天皇が見咎めるではないか）、と困惑してみせる。すなわち、祭祀の頂点に立つ不可侵の一組への割り込み、挑戦をたしなめている。それでいて、額田王が先に「君」に恋歌を贈るという積極さを見せ、溢れるほどの媚態をもって「君」に歌いかけ、蠱惑的な中年の恋の狩人の相貌を帯びている。

この見立てに応じた大海人皇子は、「君」を自分のこととし、額田王を「紫の丹穂へる妹」（美しくて若々しい恋人）と賛美し、たとえ「人妻」であつても（あるから）憎くないので激しく恋している、と直線的に関係を迫る。この歌の作者・皇子は、額田王に劣らない壮年の恋のベテランの相貌を帯びている。ここでいう「人妻」は日常の男女関係を示しており、この祭日ばかりはそれを超越できるという論理を皇子は採っている。ここでいう「人妻」は祭祀世界における「一夜妻」とは別の概念である。大海人皇子は①で暗示された「一夜妻」を日常生活における「人妻」に微妙にずらしつつ「一夜妻」と重ねているところに、祭祀世界の深奥にある禁忌すら破りかねない愛の気迫がある。

蒲生野の贈答歌の虚構性 しかしながら、額田王と大海人皇子には、葛野王という共通の孫がおり、二人は既に熟年と熟女というべき年齢になっている。この時の大海人皇子は四七歳であり、額田王は伊藤博（一九八三、九四頁）によると最低三八・九歳だった。いかに「人妻」に我も交はらむ我が妻に人も言問うような男女和合の場であつても、かつて夫婦であり共通の孫までいる熟年同士のカップルは絵になりにくいところである。ここに、①・②にまつわる演劇臭・虚構性が浮き彫りになってくる。

①によると、作者の額田王は蠱惑的な中年の恋の狩人の相貌を帯び

ていた。これに対して、②はその額田王を「紫の丹穂へる妹」と賛美し、「人妻」と呼称しているものの、これは青春時代の妻に対する戯れにすぎず、いずれも熟年の額田王に対する誉め殺しである。②で力強く関係を迫るように演じてみせた大海人皇子にしても、既に熟年に達している。すなわち、初々しい若者や力強い壮年たちによる紫の愛の祭典は、熟年カップルによって思いっきり誇張され、演出されている。このやり取りは、満座の喝采、どよめきをもって受け止められたろう。このように、この贈答歌は薬狩りの祭祀世界を踏まえた絶妙な当意即妙の掛け合いであり、愛の力量感に溢れている。この意味で、蒲生野での薬狩りの饗宴での贈答歌は、民俗的類型的な愛の祭典の上に大輪を咲かせた、近江朝の紫の恋の花だった。

盛会だった蒲生野の薬狩り 天智天皇七年（六六八）正月に即位した天智天皇は、その年の五月五日に宮廷あげて威風堂々とこの蒲生野の薬狩りを催している。そして、翌年の五月五日にも山科野でも盛大に薬狩りを催している。このように『日本書紀』に殊更に記載するほどの大掛かりな薬狩りの記事が続くのは、蒲生野の薬狩りが盛会だったからではなからうか。

もとより、その盛会ぶり・大成功のシンボルが、①額田王と②大海人皇子の紫の贈答歌である。その贈答歌は一見すると、薬狩りの主催者・祭主である天智天皇が霞んで見える。しかし、伊藤博（一九八三、九五頁）によると、男組の鳥獸狩りと女組の紫草狩りの状況が活写され、その和合・ロマンも遺憾なく演出されているので、それはその行事の主催者である天智天皇の賛美に直結している。

あぶれた男と待ち焦がれる女 なお、⑬「紫草を草と別く別く伏す鹿」が民間の薬狩りの男女和合の場で女人にあぶれた男の恋歌とも解釈でき、また⑭「紫草の根延ふ横野」が薬狩りで好きな男に逢いたいと春から待ち焦がれる女の恋歌とも解釈できる（一三で後述）。

5 紫の糸を縫って貫く

菖蒲と橘の縷と薬玉 薬狩りでは男も女も菖蒲や橘(数柑子)で作った「縷」・草冠を被り、同じく菖蒲や橘で作った「薬玉」を飾っている。桜井満(二〇〇八、一一八―一三六頁)は、菖蒲の節供の縷などの作り物は、神事に奉仕する者の標だ、と述べている。菖蒲や橘が縷や薬玉になる例を、次に挙げる。

ほととぎす 厭ふ時なし あやめぐさ 縷にせむ日 こゆ鳴き渡れ
(十一―1955、夏の雑歌、鳥を詠む)

ほととぎす 待てど来鳴かず あやめぐさ 玉に貫く日を いまだ遠みか

(八―1490、夏の雑歌、大伴家持の霍公鳥の歌一首)

ほととぎす 鳴く五月には あやめぐさ 花橘を 玉に貫き
(一に云ふ、「貫き交へ」) かづらにせむと (三―423、山前王)

ほととぎす 鳴く初声を 橘の 玉にあへ貫き かづらきて

(二九―4189、大伴家持)

紫の糸を縫って橘を貫く 次の⑤も、「紫の糸」で山橘を「貫」いて薬狩りで用いる祭具の縷や薬玉を作ろうとしている。

⑤紫の 糸をそ我が縫る あしひきの 山橘を 貫かむと思ひて
(七―1340、譬喻歌)

「山橘」は夏に白い花を咲かせる。縫った紫の糸でこれを貫き、祭具の縷あるいは薬玉を作ろうとしている。薬狩りは紫の小忌衣を纏う定めなのでこの「紫の糸」は小忌衣の一種であり、これで貫いた縷あるいは薬玉は薬狩りによりふさわしい祭具になる。

この祭具は薬狩りで恋人に贈られ、愛の証し、「娉の財」にもなつたろう。すなわち、紫の糸で貫かれた祭具の縷・薬玉が、薬狩りに付随する恋の場によって恋のアイテムになっている。このように祭具が恋のアイテムに変容するあり方は、小忌衣の紫衣が恋衣に変容するあり方と軌を一にしている。

そして、この信仰行為と愛の行為が例年反復されると、「紫の糸を縫って山橘を貫く」ことが薬狩りで恋する相手との太い絆を築いて愛を成就することの譬喩になる。したがって、このような習俗に裏付けられたこの歌のあり方も、標準的で典型的にならざるをえない。

糸を縫って橘を貫く類歌 薬狩りで糸を縫って橘を貫くと述べる類歌として、次の歌がある。

片縫りに 糸をそ我が縫る 我が背子が 花橘を 貫かむと思ひて
(十一―1987、夏の相聞、花に寄する)

「我が背子」(恋人)に贈る縷・薬玉を作ると述べ、この品物は恋のアイテムになっている。「片縫り」は一筋だけ縫りを入れた糸なので弱く、これに片思いの意を込めているだろう。この糸も紫の糸かもしれない。

枕草子の五月の節供 『枕草子』三九段は、五月五日の節供の様子を次のように描いている。ここで用いた本文は、『枕草子 紫式部日記』(一九六五)である。屋根に菖蒲や蓬を葺き、薬玉を飾り、菖蒲で飾った挿櫛を挿し、格好いい草木の折枝を長い菖蒲の根に「斑(村)濃

の組」糸で結び、唐衣や汗衫などにつけている。「斑(村)濃の組糸」とは、濃淡のある紫や紺の組糸である。これらは、葉狩りの伝統の上にあるものである。

一一 成女戒の紫の斑の縵

1 成女戒の縵

成女戒の縵 成女戒を挙げた乙女は直ちに恋の対象になり、次の⑫のようにその日のうちに愛を告白されている。

⑫紫の まだらの縵 花やかに 今日見し人に 後恋ひむかも

(十二—2993、物に寄せて思ひを陳ぶる)

「紫の斑の縵」は、実景でもあるので、「花やかに」に懸かる有心の序詞・修辭になっている。「今日」は成女戒という晴の日である。「紫の斑の縵」はこの成女戒に着用した小忌の標で、恋衣としての斑ではない。しかし、成女戒を経た女は恋愛して結婚する資格を正式に認められているので、この縵をつけた乙女に将来懸想することを作者(男)は予感している。このように、乙女の頭を飾る「紫の斑の縵」には恋情を伴うべき儀礼的な背景がある。

2 はね縵今する妹

妹との共寝 成女戒に着用した小忌の標として、他に「はね縵」がある。その用例は四例あり、いずれも次のように「はね縵今する妹」として固定し、恋情発想をとっている。

はね縵 今する妹が うら若み 笑み怒りみ 付けし紐解く
(十一—2627、物に寄せて思ひを陳ぶる)

「はね縵」は成年に達した女がつける髪飾り・草冠で、神事に参列している者の身に付けなければならぬ小忌の標だろう。「はね縵」が成女戒を受ける時の標であることは、折口信夫(一九七八、一五七頁)が夙に指摘している。この「はね縵」を頭に被って成女式を挙げたばかりの女はうら若いので、男は女を赚したり脅したりして紐を解き共寝する、と官能的に述べている。この歌は、成女戒を挙げればその日(今)のうちに自由に恋愛できることを如実に示している。

なお、「付けし紐」も本来小忌衣であるものの、恋の場で恋衣に変容している。

妹を共寝に誘う

はね縵 今する妹を うら若み いざ率川の 音のさやけさ

(七—1112、雑歌、河を詠む)

この歌の本旨は、「率川の音のさやけさ」にある。成年になったばかりの娘があまり初々しいので、「いざ」(さあおいで)と共寝に誘惑する、という上の句が「率川」を導く序詞になっている。

家持と童女との贈答歌

大伴宿禰家持、童女に贈る一首
はねかつら 今する妹を 夢に見て 心の内に 恋ひ渡るかも

(四—705)

童女の来報ふる歌

はねかつら 今する妹は なかりしを いづれの妹ぞ そこば
恋ひたる (四一七〇六)

家持が成女戒を今挙げている「童女」に恋を告白し、「童女」がそれをはぐらかしている。

以上のように、成女戒を今挙げている「はね縋今する妹」が男たちにとって恋の対象として憧れの的になっているので、このように乙女の頭を飾る小忌の標の「はね縋」に恋情が伴いやすかった。

3 薬狩りの成女戒

乙女が被る葉根縋 「はね縋」の実体はわかりにくいものの、「葉根縋」(あるいは羽根縋)で、聖なる植物の葉と根(あるいは鳥の羽根)を縋として頭に被るものだろう。用語例を見ると、「葉根縋」と「波祢縋」が各二例ある。この用語例に実意があるとすれば、それは前者の「葉根縋」だろう。

その「葉根縋」の「葉」と「根」とは、薬狩りにおける薬草の葉と根ではなからうか。一〇で述べた『伊勢物語』五十二段と『大和物語』百六十四段を参照すると、女の薬狩りは「菖蒲」の採取であり、「菖蒲」で巻いただろう「粽」を男に贈り、また一〇で述べたように薬狩りでは男も女も「菖蒲の縋」を被っているのだ、彼女の場合は「菖蒲」の葉と根で作った「菖蒲の縋」を被った、と想定できる。

そして、成女戒を受ける乙女の被る縋・草冠をとくに「葉根縋」と称した、とも想定できる。なぜ成女戒を受ける乙女の「葉根縋」だけが「葉根縋今する妹」と特別扱いされたかという点、この「葉根縋」が成女戒を受けた娘たちを特定する印しだからであり、この日をもって初々しい彼女たちとの自由恋愛が許され、殊更に男たちの関心を集め

たからだろう。

男が被る羽根縋 なお、一〇で述べたように男たちも薬狩り・端午の節供では「菖蒲の縋」を被っている。そして、もし菖蒲の縋の他に「羽根縋」を着用するとすれば、鳥獣を狩る男たちがこれを着用するに相応しい。『日本書紀』によると、推古朝一九年(六一一年)五月五日に菟田野で薬狩りを執り行い、その時の男たちの頭を飾ったのが次の髻花だった。

是の日に、諸臣の服の色、皆冠の色に随ふ。各髻花着せり。則ち大徳・小徳は並に金を用ゐる。大仁・小仁は豹の尾を用ゐる。大禮より以下は鳥の尾を用ゐる。(推古紀一九年五月五日の条)

このように一握りの高位高官を除いた宮廷人の男性のほとんどが、「鳥の尾」を髻花にしている。これは宮廷の行事であるものの、これから民間の男たちも鳥の尾の縋・「羽根縋」を用いていた、と推測できる。鳥は男たちの狩る薬でもあるので、鳥の尾の縋・「縋羽根」が薬狩りをする男たちの小忌の標になってもいい。

薬狩りの成女戒 こうしてみると、「妹」が薬草で作った「葉根縋」今する「日は、五月五日を中心とした薬狩りの日であり、薬狩りは成人戒のみならず成女戒も伴い、二部の男女の集いで乙女も大人の仲間入りしていたことになる。そして例えば、貴公子の家持に(四一七〇五)で口説かれた「童女」が、大人ぶって(老いづきて)(四一七〇六)のように応酬し、また成女戒を挙げたばかりの「はね縋今する妹」がうら若み笑み怒りみ付けし紐解く(十一一2627)こともしていた。薬狩りは大人社会・社交界へのデビューの日であり、祝福された若々しい男女の愛の祭典でもあった。こうして小忌の標の「葉根縋」に、恋情が纏綿することになる。

紫の斑の縷花やかに今日見し人 以上の「葉根・縷今する妹」と同じ位相にあるのが、⑫「紫の斑の縷花やかに今日見し人」である。すなわち、紫根採取も代表的な葉狩りなので、「紫の斑の縷」が葉狩りの小忌の標になる。そして、葉狩りに成女戒が伴い、愛の祭典でもあったので、「紫の斑の縷花やかに今日見し人」に「後恋ひむ」と、恋情が伴うことになる。この「紫の斑の縷」は、恋衣の一類の「斑の衣」に連なり、恋人・夫を迎えるときに結う「濃紫の元結」（古今集、十四・693）にも連なっている。

一一 年中行事からの発想

年中行事からの発想 以上、四であげた花（葉）摺りを詠む若干の歌と九く一一であげた紫を詠む五首（⑭・①・②・⑤・⑫）を総合してみると、これらの歌は小忌衣を着用する年中行事（歌垣・成人戒・成女戒を付属させる葉狩り）の場から発想されており、それらの年中行事に恋の要素があることから、その小忌衣に恋情が伴い、恋衣にもなっている。すなわち、男女が相逢っている祭り（恋）の現場の叙述であり、その小忌衣・恋衣としての紫衣から恋詞の「色に出づ」あるいはその変形「紫は灰指すものそ」が発想され、紫の糸を縫って山橘を貫くことが愛の成就の譬喩になり、さらに恋人賛美の「紫の丹穂へる妹」・「紫の斑の縷の花やかに今日見し人」を生んでいる。

恋衣の前身の小忌衣 このように、私的な妻訪いの恋衣として紫衣を用いる習俗、ならびに共同体の催す年中行事（歌垣・葉狩り）の小忌衣・恋衣として紫衣・青摺衣（山藍摺り）を用いる習俗があるのを見ると、妻訪いの恋衣の背後にも青摺衣などの小忌衣としての性格があるのではなからうか。すなわち、訪れる男とこれを迎える女の関係にはなんらかの神事性・儀礼性を伴っていた、と考えられる。妻訪い

が夜に限り、また神々の活動も夜に限るところをみると、夜に巫女が神を迎える方式で女は男を迎えたのではなからうか。一對の男女の恋もまたこのような神事性・儀礼性を持つとすると、私的な妻訪いの恋衣の前身も小忌衣だったといえよう。

そして、次第に神事性・儀礼性が薄まるに連れて、俗的な意味合いが強くなり、各種の摺り衣・染め衣が工夫され、さらには華美な大陸風の衣類、織物などまでも加わって「恋衣」という素敵な名称まで生まれた、と考えられる。

一二 周縁に放つ紫の光芒

1 紫野の鳥獸

紫根染めを踏まえた恋の色 以上、紫根染めは私的な妻訪いの恋衣、ならびに公的な年中行事の恋情を帯びた小忌衣として大いに用いられている。このように紫が恋の場に定着してくると、紫染めを明示あるいは示唆しなくても、以下の六首（⑬・⑧・⑭・⑥・⑦・⑨）のように「紫草」・「紫草の根」・「紫」というだけで恋情が絡むことになる。すなわち、紫根染めを踏まえた紫が恋の色として光芒を周縁に放ち、恋一色に染め上げていく。この章の見出しを「周縁に放つ紫の光芒」とした所以である。その分、これらの歌の発想された場の考察が後退する印象を与えるものの、場の考察もする。

紫野の鳥獸 以下の二首（⑬・⑧）は、紫野の鳥獸を紫の恋で染め上げていく。

紫野の鹿 まず、⑬紫野の鹿の歌は、紫草を恋する女人、鹿を恋する男に見立てている。

⑬紫草を 草と別く別く 伏す鹿の 野は異にして 心は同じ
(十二・13099、物に寄せて思ひを陳ぶる)

紫草を他の草と区別して寝る鹿のように、別れ別れに寝ているけれども、相思う気持ちは互いに同じ、と述べる。

野生の紫草は極端な乾湿を嫌うため、水はけがよく日のよく当たる東か南の地の、しかも隣接植物によって受光量や乾湿を自然に調整できるような環境に生育する。これは原始の相を保つ静謐に満ちた区域で、鹿の好んで伏す地である。上三句はこの鹿の生態を詠んでいる。

女人の譬喩 それと同時に、紫草の紫根染めが恋衣になるので、せめて紫色を染め出す紫草(紫根)に伏す、とも述べている。すなわち、他の人には目もくれず、せめて恋人に縁の深い愛すべき紫草に寝て偲ぶという。

ここの「紫草」と男鹿は恋人同士の譬喩であり、「紫草」は愛しい女人になっている。色衣・恋衣を染め出す「紫草」を愛しい女人に見立てる譬喩の類例は、四で述べたように「垣津幡」(七・1345)・「小水葱」(三・407)・「土針」(七・1338)にも見える。そして、この恋する女人・「紫草」の光芒が、その紫草の生える野にいる男鹿を恋する男に染め上げている。

男の愛の誓い歌 この恋歌は、都合があつて妻訪いできない男が女人に贈った愛の誓い歌という体裁をとっている。

薬狩りであぶれた男の恋情 あるいは、この歌は薬狩りで女人にあぶれた男の恋歌かもしれない。薬狩りで男たちが鹿などの鳥獣を狩り、女たちが紫根などの薬草狩りをしているので、鹿は男、紫草は女に見立てられやすい。その男が一夜の最愛の恋人を獲得し損ね、せめて薬狩りの小忌衣・恋衣に縁の深い紫草に伏してその女人を偲ぶ、という歌意ではなからうか。薬狩りで他の女(草)と区別して(別く別く)最

愛の女人(紫草)しか選択しないと、当然このように独り寝の場合も出来る。

しかし、その実態は女人に振られて独り寝せざるをえなくなった男をからかった歌だろう。すなわち、やけくそ気分の男を逆に誇大に美化し、共寝できない最愛の女人に愛を誓うという殊勝な形にしたのではなからうか。もとよりそういう事態になった特定の男をからかうのではなく、そうならないようにという戒めだろう。もしそうだとすると、この歌は薬狩りの男女の宴で愛唱された謡い物(歌謡)だということになる。

古今集と伊勢物語の紫野の草木 ⑬「紫草を草と別く別く」のように恋衣・色衣を染め出す「紫草」を恋人に見立てる発想法は、「紫の一本故に」(古今集、十七・867)と「紫の色濃き時は」(古今集、十七・868・勢語四十一段)にも継承されている。五で述べたように「紫の一本故に」(古今集、十七・867)は、恋衣・色衣を染め出す紫草(「恋人」が一本でも武蔵野に生えていれば、その野原に生えている紫草以外の草木(恋人の縁の者)までが愛しく思える、と述べる。

妻のおとうとをもて侍りける人に、袍を贈るとて、読みてやりける

むらさきの 色濃きときは 目もはるに 野なる草木ぞ わかれざりける (古今集、十七・868、雑歌上、業平朝臣)

『伊勢物語』四十一段にも、これとはほぼ同じ趣旨の地の文を載せ、同じ歌が載っている。野に生える紫草(紫根)で恋衣を染め出す色が濃い(妻への愛情が深い)時は、目の届く遠くまで野の草木と紫草の区別がつかない(妻の縁者は他人と思えない)、と述べる。『伊勢物語』の作者が「紫の一本故に」(古今集、十七・867)を踏まえて

「武蔵野の心なるべし」と評したのは、この歌の核心をよく指摘している。

以上、このように恋衣・色衣にかかわる紫草（＝恋人）が一本でも野山に生えていれば、その野に生えているあらゆる草木までが愛の対象にされている。

こうしてみると、⑬は紫草を女人の譬喩にする平安文学の先蹤である。

隔ての有無 なお、⑬は「紫草」と他の草を峻別し、「紫の一本故に」（古今集、十七ー867）と「紫の色濃き時は」（古今集、十七ー868・勢語四十一段）は「紫草」と他の草木が区別できないという。このように紫草と他の草木に対する隔ての有無がありながら、いずれの歌も「紫草」を最愛の女人の譬喩として強調している点で共通している。

紫野の鶯 次いで、⑧春の紫野の鶯は、恋する女人に見立てられている。

⑧紫草の 根延ふ横野の 春野には 君をかけつつ うぐひす鳴くも
(十一ー1825、春の雑歌、鳥を詠む)

「紫草の根延ふ横野の」「鶯」は恋する女で、「君をかけつつ」恋心を訴えている。すなわち、「紫草の根」は恋衣の紫根染めの染料なので、その原料の生える紫野の光芒がその野にいる鶯を恋する女人に染め上げている。

君を恋う女人 この歌は、愛しい君に愛を告白する恋歌という体裁をとって君が自分を妻訪いするように求めている。

葉狩りを待ち焦がれる女 日に見えない土中の紫草の根が春に「根延ふ」と表現するこの恋歌の背後には、紫根採取の経験があるう。し

てみると、この歌は鶯の鳴く春になって夏の葉狩りを待ち焦がれる女の恋歌かもしれない。女たちは紫根などの葉草狩りをしているので、「紫草の根延ふ横野の」「鶯」が恋する女に見立てられ、葉狩りの恋の場で逢いたいと「君をかけつつ」春のうちから恋心を訴えている。夏の葉狩りを挟んで、葉狩りで語り合った「垣津幡丹つらふ君」との再会を願う女人（十一ー2521）や、葉狩りで叶わなかった男との出合いを葉（粽・雉）の交換にことよせて叶えようとする女人（勢語、五十二段）がいる一方で、⑧のように葉狩りで好きな男に逢いたいと春から訴える女人もいる。

恋衣の歌と同一発想 ⑧の歌い振りは類型的一般的大衆的で、謡い物（歌謡）あるいは謡い物風であり、四で述べた次の「恋衣」の歌と同じ発想をとっている。

恋衣 著奈良の山に 鳴く鳥の 間なく時なし 我が恋ふらくは
(十二ー3088、物に寄せて思ひを陳ぶる)

「紫草の根延ふ横野の春野」は「恋衣著奈良の山」に相当し、「君をかけつつ鶯鳴くも」は「鳴く鳥の間無く時無し我が恋ふらくは」に相当している。すなわち両歌とも、色衣・恋衣にかかわる野山にいる鳥が、頻りに恋人を思ふ者の譬喩になっている。

紫野の鳥獣・草木 以上、⑬・平安期の紫草の歌・⑧・「恋衣」（十二ー3088）などのように恋衣・紫衣にかかわる紫草が野山にあれば、その紫草はもとより、そこにいる動物（鹿・鶯）や他の草木までが恋する者・愛の対象として染め上げられている。このように、紫根染めを踏まえた恋の色としての紫の光芒が周縁に放たれている。

また、⑬・⑧が発想された場合は特定できないものの、妻訪い（恋人を迎える）あるいは葉狩りにあるようである。

2 紫の海辺

紫の海辺 以下の四首(⑬・⑭・⑮・⑯)は、枕詞の「紫の」が地名の「粉濁の海」と「名高の浦」に懸かり、これらの海辺を紫の恋で染め上げている。

紫の粉濁の海の玉 まず、次の⑬は「紫の」が「濃紫」の「濃」から「粉濁の海」に懸かる例で、粉濁の海の産物(玉)を上げながら恋を述べている。

⑬紫の 粉濁の海に 潜く鳥 玉潜き出ば 我が玉にせむ
右の歌一首 (十六ー3870)

二で述べたように、「紫」と「濃」の関係は他にその例を見ない。しかし、次のように恋衣の染衣に関する「浅」・「薄」・「深」の例があるので、染衣の「薄さ」・「濃さ」にも関心が寄せられたろう。

桃花染めの 浅らの衣 浅らかに 思ひて妹に 逢はむものかも
(十二ー2970、物に寄せて思ひを陳ぶる)

紅の 薄染め衣 浅らかに 相見し人に 恋ふところかも
(十二ー2966、物に寄せて思ひを陳ぶる)

紅の 深染めの衣 色深く 染みにしかばか 忘れかねつる
(十一ー2624、物に寄せて思ひを陳ぶる)

いずれも、恋衣・色衣の「浅さ(薄さ)」・「深さ」が恋情の「浅さ(薄さ)」・「深さ」を意味しているので、「深さ」は「濃さ」の存在を浮き彫

りにしている。こうしてみると、⑬の恋衣の「紫の」は単に「濃」に懸かるだけでなく、恋情の「濃さ」をも導く有心の枕詞だ、とみるべきだろう。

また、四で述べた「見渡せば」(六ー951)のように「玉」(真珠)を女人(恋人)に譬える例は多い。とすると⑬の歌意は、紫色の濃い(愛情の濃やかな)粉濁の海に潜ってあさる鳥が玉を拾い出したら、それを私の玉(恋人)にしよう、となる。すなわち、⑬の作者は「粉濁の海」の特産品の「玉」を恋衣・紫衣の濃く粉濁の海の恋人と捉え、粉濁で情の濃やかな恋人と出会うことを期待している。

平安時代の「紫の色濃き」恋 ⑬のように恋衣の「濃紫」が濃やかな愛情を意味す発想は、次のように平安時代に受け継がれている。恋衣の「紫の色濃き」恋も濃やかな愛情を意味している。

五で述べたように、「君来ずは聞へも入らじ」(古今集、十四ー693)の作者(女性)は、「濃紫」の「元結」を結っている。この作者は「霜は置くとも」「君来ずは聞へも入らじ」といつているので、「濃紫」の「濃」には女の愛情の濃さも込められている。

五で述べたように、「まだきから思ひ濃き色に」(後撰集、十八ー1277)の作者(男性)は、「若紫の根」で恋衣を「濃き色」に「染め」ようとしているので、この若紫の「濃き色」は男の濃い恋情を表している。

前述したように、「紫の色濃き時は」(古今集、十七ー868・勢語四十一段)もほぼ同趣旨で、野に生える紫草(紫根)で恋衣を染め出す色が濃い(妻への愛情が深い)時は、目の届く遙か遠くまで野の草木と紫草の区別がつかない(妻の縁者は他人と思えない)、と述べる。

一〇で述べたように、「結びつる心も深き」(源語・桐壺の巻)の「初元結」の「濃き紫の色」は光源氏の濃やかな愛情の比喩になっている。

筑前國の謡い物

『萬葉集釋注八』（一九九八、五六七・五六八頁）

によると、⑰は前歌群（筑前國の志賀の白水郎の歌十首）に引き続く筑前國の謡い物であり、⑰に続く歌（十六・一三八七）は確実にそういう歌である。⑰は志賀の白水郎たちの見聞をもとにして生じた歌で、折々に詠われたろう、と述べている。これは正鵠を射ていよう。

催馬樂の「紀の国」

⑰の類想歌として、次の催馬樂の「紀の国」の前半部がある。

紀の國の 白良の濱は 白良の濱に 降りゐる鵜 はれ その
珠持て來
風しも吹けば 餘波し立てれば 水底霧りて はれ その珠見
えず
(催馬樂一三三、紀の國)

海鳥（鵜）に「玉」（真珠）を取ってくるように要求すると、風が強くて波が立ち、水底も不透明なので玉が見えない、と答えている。この歌謡の面白さは、「玉」（真珠）を素敵な女人に譬えて男がこれを手の中にしようとし、そう安々と恋人は手中にできないと女がいなしいてるところだろう。

このような男女の掛け合いが催馬樂にもあるので、民間でこのような歌謡が好まれた、と想定できる。例えば、次の「海の底沈く白玉」（七・一三三）をはじめとする「玉に寄する」譬喩歌——一首は、その類想歌ではなからうか。

海の底沈く白玉 風吹きて 海は荒るとも 取らずは止まじ
(七・一三三、譬喩歌、玉に寄する)

この歌は「紀の国」と同一主旨を持ち、また「紀の国」の続きとして

も通用しそうである。この種の歌（歌謡）は、地名を入れ替えながら各地を流伝しやすい。

こうしてみると、⑰は民間のこのような男女の掛け合いの片割れではなからうか。この⑰に引き続いて「紀の国」の後半部が入ってもよいほどに、その歌い振りは類型的一般的で、典型的な謡い物（歌謡）になっている。

難波の海の玉

この民間の男女の掛け合いの謡い物は宮廷人にも愛好され、四で述べた「見渡せば」（六・九五）に対する「韓衣」（六・九五）もその例である。この二首は四首一組の一部なので、次にその全体を上げる。

(神亀) 五年戊辰、難波宮に幸す時に作る歌四首
大君の 境ひたまふ 山守置き 守るといふ山に 入らずは止まじ
(六・九五)

見渡せば 近きものから 岩隠り かがよふ玉を 取らずは止まじ
(六・九五)

韓衣 着奈良の里の 妻まつに 玉をし付けむ よき人もがも
(六・九五)

さ雄鹿の 鳴くなる山を 越え行かむ 日だにや君が はた逢はざらむ
(六・九五)

右、笠朝臣金村の歌の中に出づ。或は云はく、車持朝臣千年の作なり、といふ。

『萬葉集釋注三』（一九九六、三五・三五二頁）は、この四首を次

のように解している。前の二首は男の立場の譬喩歌で、女官に迫る意気込みを述べている。一首目が山を持ち出しているのに対して、二首目は難波の海の「玉」を持ち出して変化を持たせている。後の二首は女の立場の歌で、前の二首にしつぺ返しをしている。三首目が海の「玉」を持ち出しているのに対して、四首目は山を持ち出している。この波紋型対応を持つ四首一組は、女官も加わる難波の宮の宴席で披露された座興の歌で、金村が男の立場で前の二首、千年が女の立場で後の二首を詠み、拍手喝采を得たろう。そして、「座興をとりもつかような裏芸によって宮廷人を楽しませるのは、宮廷歌人の役割の一つで、それは、初期万葉の額田王以来の伝統であった。」と述べている。これは額田王の①の作歌事情をも踏まえており、正鵠を射た解釈だろう。

この四首は宮廷人の作ながら、前述の民間の謡い物とほぼ同じ趣向をとり、「見渡せば」(六一・九五)の答歌として「韓衣」(六一・九五)に代えて「紀の国」の後半部が入ってもいいほどである。

恋の紫の濃し粉濁の海 このように、海辺に「玉」があつて(素敵な女人がいて)これを入手したい(恋人にしたい)と述べ、これに答えてその恋心をいやす粹な恋の歌謡が、海辺を舞台にして万葉人に愛好されていけば、なんらかの縁さえ得れば恋の紫がこの歌謡・歌と容易に合体しうる。⑬の場合、その縁とは濃やかな恋情を意味する「濃紫」と「粉濁の海」の語呂合わせだった。

このように、濃やかな恋情を意味する「濃紫」、すなわち紫根染めを踏まえた恋の色としての紫の光芒は、ここでも周縁に放たれ、主題の恋を増幅している。

紫の名高の浦の産物 次いで、次の三首(⑥・⑦・⑨)の「紫の」は「名高の浦」(和歌山県海南市名高)に懸かる例で、名高の浦の産物(砂地・なのりそ・藻)を上げながら恋を述べている。

⑥紫の 名高の浦の 砂地 袖のみ触れて 寝ずかなりなむ
(七―1392、譬喩歌、浦の沙に寄する)

名高の浦の砂地(最愛子)に袖だけ触れて共寝しないままになるのではないかと懸念している。「砂地」(細かい砂地)は「最愛子」に通じている。

⑦紫の 名高の浦の なのりそ 磯になびかむ 時待つ我を
(七―1396、譬喩歌、藻に寄する)

⑨紫の 名高の浦の なびき藻の 心は妹に 寄りにしものを
(十一―2780、物に寄せて思ひを陳ぶる)

⑦の名高の浦の産物・「なのりそ」(海藻のほんだわら)は女人の譬喩で、この恋人が自分に「靡く」のを待つ、と述べ、⑨の名高の浦の産物・「靡き藻」は自分の恋心の譬喩で、この恋心が「妹に寄」った、と述べている。

恋の色で名高い紫 通説では、「紫の」が「名高の浦」に懸かるのは、大和朝廷の定めた服色令が高位高官の者にのみ特別に着用を許された名高い紫衣だからだという。

しかし、以上の紫の歌から総合してみると、紫が恋の色として名高かったことに由来している、とみるべきである。このように恋で染め上げられた名高の浦こそ、これら三首の主題である恋の舞台として相応しい。

恋衣の染料の砂地 ⑥の「砂地」は「砂」ともいい、これに触れると色が染まる。次の歌はそれを示している。

玉津島 磯の浦廻の砂にも にはひて行かな 妹も触れけむ
(九—1799、挽歌、柿本朝臣人麻呂の歌集に出づ。)

玉津島の磯の浦廻の砂にも染まッて行きたい、今は亡き愛妻も触れたろうから、と述べている。ここの「丹穂ふ」は「砂」に触れることによッて衣が染まる意である。人麻呂夫妻は、旅の記念としてこの特産品を衣に染めている。

これらの「砂地」や「砂」に類するものに「埴生」があり、次の歌ではこれで旅人の衣を染めようとしている。

太上天皇、難波宮に幸す時の歌

草枕 旅行く君と 知らませば 岸の埴生に にははさましを

(二—69、雑歌)

右の一首、清江の娘子、長皇子に進しなり、姓氏未だ詳らかならず。

旅行く方と知っていたら、特産の岸の赤土でその衣を染めてあげればよかった、と述べている。この歌の真意は、土地の特産品の「埴生」を紹介しながら、それでお客さんの恋衣を染めてあげる（恋人になる）のに、と媚態を示すところにある。この歌は遊行女婦一流の座興の歌で、遊行女婦の清江の娘子が行幸の宴席で長皇子にしなだれかかつて披露したのだろう。なお、旅先での染料で恋衣を染める（恋を成就する）ことを述べる類例としては、四で挙げた「草枕旅行く人も行き触ればにほひぬべくも咲ける萩かも」（八—1532）がある。

女人の譬喩 このように赤土・黄土による染め衣が恋衣になると、次の歌のようにその染料（砂地）が恋人の譬喩にもなる。

衣手の 真若の浦の 砂地 間なく時なし 我が恋ふらくは
(十二—3168、羈旅にして思ひを発す)

真若の浦の「砂地」は、「最愛子」と通じて恋人の譬喩にもなっている。色衣・恋衣を染め出す染料（原料）を愛しい女人に見立てる譬喩の類例は、「垣津幡」（七—1345）・「小水葱」（三—407）・「土針」（七—1338）・⑬「紫草」（十二—3099）にも見えており、砂地を女人の譬喩にするのもその一類である。諸説では初句「衣手の」の落ち着きが悪いものの、「衣手」を恋衣として染める「砂地」とつながるので、「衣手の」は「砂地」に懸かると見るべきである。この恋歌は旅先の産物の「砂地」で染めた恋衣を下地にして、旅先の娘＝最愛子をひたすら恋慕する、と述べている。この歌は、恋衣を踏まえて「間なく時なし我が恋ふらくは」と述べる点で、恋衣の歌（十二—3088）との類歌性が高い。

報われない恋の諸譚 こうしてみると、⑥「紫の名高の浦の砂地」の歌意が鮮明になってくる。すなわち、土地の産物の「砂地」で恋衣を染めたものの、その「砂地」＝最愛子と共寝できそうもない、と述べている。この主旨・趣向は恋の草臥れ儲け・報われない恋の諸譚であり、笠郎女の③や東歌⑮と同じである。

藻の靡き・寄り ⑦「紫の名高の浦ののりそ」と⑨「紫の名高の浦のなびき藻」の類歌として次の例があり、類歌性が高い。

明日香川 瀬瀬の玉藻の うちなびき 心は妹に 寄りにける
かも (十三—3267)

水底に 生ふる玉藻の うちなびき 心は寄りて 恋ふるこの
ころ (十一—2482、物に寄せて思ひを陳ぶる)

波のむた なびく玉藻の 片思に 我が思ふ人の 言の繁けく
(十二—3078、物に寄せて思ひを陳ぶる)

いずれも「玉藻」は恋する者の譬喩であり、「藻の靡き」は恋心の「靡き」・「寄り」・「片思ひ」を示している。

海辺の謡い物 ⑬「紫の粉濁の海」と同様に、⑥・⑦・⑨「紫の名高の浦」も、名高の浦で恋人と出会うことを期待し、名を入れ替えながら各地を流伝しやすい。例えば、難波の遊行女婦の歌った「草枕旅行く君」(二—69)と旅の男の歌った⑥「紫の名高の浦の砂地」が地名と特産品(染料)を統一すれば、旅先の恋する女人の「埴生(砂地)にははさましを」(二—69)と旅先での恋をはぐらかされる男の⑥「砂地(埴生)袖のみ触れて寝ずかなりなむ」が絶妙な恋の掛け合いの謡い物になる。それほどにその歌い振りは類型的一般的である。

恋の紫で名高い浦 このように、類歌性の高い恋歌が海辺でよく歌われていれば、やはりなんらかの縁さえ得れば恋の紫がこの歌と容易に合体しうる。⑥・⑦・⑨の場合、その縁とは「紫」が恋の色として「名高」という語呂合わせだった。そのあり方は⑬と同じで、ここでも紫根染めを踏まえた恋の色としての紫の光芒が周縁に放たれ、主題の恋を増幅している。

3 周縁に放つ紫の光芒

周縁に放つ紫の光芒 以上、二三であげた紫野の鹿と鶯、紫の粉濁の海の玉、紫の名高の浦の六例(⑬・⑧・⑬・⑬・⑦・⑨)は、妻訪いの恋衣として紫衣を用いる習俗、ならびに年中行事の小忌衣・恋衣として紫衣を用いる習俗を基盤にし、「紫草」・「紫草の根」・「紫」というだけで恋情が絡んでいる。すなわち、紫根染めを踏まえた恋の色と

しての紫の光芒が周縁に放たれ、「紫草」が愛する女人、紫野にいる鹿が恋する男、「紫草の根」の繁茂する野の鶯が恋する女人に染め上げられ、枕詞「紫の」を冠した「粉濁の海」と「名高の浦」も恋の海辺に染め上げられている。そして、これらの歌の発想の場は、妻訪いあるいは薬狩りにある。

一四 在来文化と外来文化の融合

1 服色令と恋衣の発想

外来文化・服色令 紫の歌一七首のうち次の④が唯一、外来文化を直接取り込み、宮廷の「服色令」を念頭に置く例である。

太宰帥大伴卿、大納言に任せられ、京に入らむとする時に、
府の官人ら、卿を筑前国の蘆城の駅家に饒する歌四首(うち一首)

④ 韓人の 衣染むといふ 紫の 心に染みて 思ほゆるかも
(四—569、相聞、大典麻田連陽春)

太宰府は大陸への出入り口の役所で、大陸文化との接触が最も濃密な場所である。その太宰府の帥(長官)を務めた正三位大伴旅人が染転して都に帰任する時の宴で、彼の部下だった大典麻田連陽春が旅人に④の惜別の歌を贈った。

上二句「韓人の衣染むといふ紫」は、紫染めが大陸渡来の染色文化であることを伝聞・知識として述べている。彼ら太宰府の官人たちの認識としては、「紫染め」は大陸渡来の文物だったろう。事実、三で述べたように貴族社会での「紫染め」は、外来文化・帰化文化の華だった。

また、この時の旅人は正三位で、支配階層で施行された服色令で特定の高官だけに認められた紫衣を着用できる身分にあった。すなわち、この服色令に示された紫は高貴さの象徴であり、極めて抽象化されている。

外来文化を濃密に享受できる支配階級における右の二点をおさえて、陽春は上官の旅人の人柄を「紫の心に染みて思ほゆ」と真情を吐露した。すなわち、ここの「紫」は旅人であり、旅人の人柄が作者・陽春の心に染みるという。

在来文化の発想

しかし、恋歌においては色衣を「染む」という表現は「恋心を抱く」の譬喩だった。とすると、「衣染むといふ紫の心に染みて思ほゆるかも」は、民間の恋衣・染衣の恋歌の伝統の延長線上にあり、その型を継承している。すなわち、恋人を恋慕して恋衣・紫衣を染めたことを下地にして、恋人に等しい「紫」、すなわち旅人が陽春の心に「染みて」慕わしいという。このように、④の発想は類型的であり、したがってその歌い振りも一般的大衆的である。

在来文化と外来文化の融合

こうしてみると、外来文化・帰化文化を直に享受できた貴族社会の紫を述べたこの唯一の例にしても、在来の民俗の恋衣・染衣の恋歌の伝統の範疇にある。すなわち、太宰府の官人が旅人に贈った紫の惜別の歌は、在来の恋の色と外来文化を享受した貴族社会の色・服色令の色が融合してできている。

2 色衣の恋情表現の転用

色衣の恋情表現の転用

次の歌は、④のあり方と似た位相にある。

奈良の京の荒墟を傷み惜しみて作る歌三首（うち一首）
紅に 深く染みにし 心かも 奈良の都に 年の経ぬべき

（六一〇四四、雑歌、作者審らかならず）

この歌の前後をみると、作者は奈良の都を捨てて彷徨する聖武朝に仕える中央の官人である。作者はかつて染えた奈良の都を「紅に深く染み」て慕っている。すなわち、ここの「紅」は都であり、都が作者の心に染みるという。

しかし、恋歌においては色衣を「染む」という表現は「恋心を抱く」の譬喩だった。とすると、上一句の「紅に深く染みにし」も、民間の恋衣・染衣の恋歌の類型の延長線上にあり、その型を継承している。すなわち、恋人を恋慕して恋衣・紅衣を染めたことを下地にして、恋人に等しい「紅」（都）が作者の心に「染みて」慕わしいという。それで、今は荒廃している奈良の都に年月を過ごそうという気になれない、と述べる。このように、在来の恋衣・染衣の恋歌の類型的な恋情表現を転用して、恋とは異なる主題（旧都愛着）を盛り込んでいる。

服色令を踏まえた出世の予祝 平安時代になると、服色令を踏まえた歌が次のように詠まれはじめる。

庶明朝臣中納言になり侍ける時、うへの衣つかはすとて
思きや 君が衣を ぬぎかへて 濃き紫の 色を着むとは

（後撰集、一五〇一、雑一、右大臣）

「君」が思いがけなくも四位の者が着る衣を脱ぎ替えて三位の者が着る濃紫の衣を着用した、すなわち三位に出世した、と右大臣の師輔が祝福している。片桐洋一（一九九〇、三三三頁）の注によると、「令によれば「濃き紫」を着るのは一位に限られ、中納言相当の従三位は薄紫であったが、この時代には三位までが濃紫を着ていたといわれる」とある。

三善のすけた、冠し侍ける時
結ひそむる 初元結の濃紫 衣の色に うつれとぞ思

(拾遺集、五・272、賀、能宣)

元服して髪を初めて結い上げ、濃い紫色の元結で結ぶ、その紫色が衣の色に移り、将来出世してほしい、と述べる。一〇で述べたように「濃紫の初元結」は、成人戒の小忌衣の後身であり、元服して性を行使できることを示す恋衣の類である。その「濃紫の初元結」から、同じ衣類の「紫の袍」を連想し、服色令で定めた「紫の袍」を着られる高位高官に出世せよ、と将来を祝福している。平安中期では袍の色は一位が濃紫、二位、三位が浅紫である。

人の元服し侍けるに

濃紫 たなびく雲を しるべにて 位の山の 峰を尋ねん

(拾遺集、十八・1170、雜賀、元輔)

濃い紫色にたなびいている雲を追しるべにして、位の山の峰・頂上を尋ねよう、と述べる。「濃紫の初元結」から瑞祥の「紫雲」を連想し、位の山の峰、すなわち官位の頂点である一位・太政大臣に榮進することとを予祝している。瑞祥の「紫雲」は、中国から渡来した思想である。とくに後の二首は、恋衣の「濃紫の初元結」が本来もっている恋愛から服色令の紫がもっている高貴・出世・榮達へ傾斜している。この点で後の二首の手法は、本来恋衣だった紫衣を服色令に示される高位高官の紫衣に読み替えた④の手法と共通している。

一五 結び

紫の恋情発想の解明 以上、『万葉集』の一七首の紫の歌が、なぜ恋情発想をとっているかを考えた。

大衆的国民的な歌

紫の歌すべてに纏綿する恋情、紫の原初的物象的あり方、作者未詳の類型的な歌の多さ、収載されている巻、部立・歌われ方の傾向をみると、生活に密着した染め衣の紫を仲立ちにして、多くは譬喩ないしは寄物陳思(物に寄せて思ひを陳ぶる)の手法で類型的に恋を歌い、その歌の多くは大衆的国民的な基盤から生まれていて、謡い物(歌謡)あるいは謡い物風である。

外来文化・貴族文化への憧憬

また、貴族社会における紫のあり方を見ると、それは大陸から渡来した紫であり、公的で概念的抽象的である。そこで、この外来文化の影響下にある貴族文化の紫に憧れた無名の人々が、紫を恋歌に詠もうとした、という説が出ている。

在来文化の恋衣

しかし、右の説は資料に片寄りがあり、容易に認めがたい。万葉の庶民的原始的な花摺り・葉摺り(垣津幡・月草・小水葱・土針)などの摺り衣・斑の衣の恋歌をみると、恋の現場で恋する男女が摺り衣を着て相逢っており、その衣は用途から「恋衣」といわれ、その一類として「韓(唐)衣」(大陸風の衣)がある。

妻訪いの習俗からの発想

また、花(葉)摺りを詠む多くの歌、斑の衣・韓(唐)衣を詠む歌、紫を詠む五首(⑩・⑪・⑫・⑬・⑭)を総合してみると、これらの歌は恋衣・紫衣を纏って妻訪いする(恋人・夫を迎える)習俗・場から発想されている。すなわち、男女が相逢っている恋の現場、あるいはその周辺の叙述であり、その恋衣としての紫衣から恋詞の「紫の色に出づ」が発想され、また「摺る」・「染む」・「着る」などが「恋心を抱く」・「恋が成就する」の譬喩になり、さらに恋人賛美の「垣津幡丹つらふ妹(君)」などを生んでいる。

また、恋衣の紫根染めを背景にした妻訪いをめぐる恋歌から、『源氏物語』若紫の巻の若紫像が造形されている。また、恋衣として紅衣と紫衣のいずれを着て妻訪うかと述べる風俗歌の「たたらめ」の本旨は、どの女を妻として選択するかということで、ここに「色好み」のプロタイプが示されている。そして、光源氏の色好みはその究極の姿である。

年中行事からの発想 また、花(葉)摺りを詠む若干の歌や紫を詠む五首(⑭・①・②・⑤・⑫)を総合してみると、これらの歌は小忌衣を着用する年中行事(歌垣・成人戒・成女戒を付属させる葉狩り)の場から発想されており、それらの年中行事に恋の要素があるので、その小忌衣に恋情が伴い、恋衣にもなっている。すなわち、男女が相逢している祭り(恋)の現場の叙述であり、その小忌衣・恋衣としての紫衣から恋詞の「紫の色に出づ」あるいはその変形「紫は灰指すものそ」が発想され、紫の糸を縫って山橋を貫くことが愛の成就の譬喩になり、さらに恋人賛美の「紫の丹穂へる妹」・「紫の斑の縷の花やかに今日見し人」を生んでいる。

以上、私的な妻訪いのときに恋衣として紫衣を纏う習俗、ならびに共同体の年中行事(歌垣・葉狩り)のときに小忌衣・恋衣として紫衣を纏う習俗から、妻訪いのときの恋衣・紫衣の前身が小忌衣だ、と推定できる。すなわち、巫女が神を迎える方式で女は男を迎えた、と考えられる。

周縁に放つ紫の光芒 そして、紫野の鹿と鶯、紫の粉濁の海の玉、紫の名高の浦の六例(⑬・⑧・⑭・⑥・⑦・⑨)は、右の妻訪いの恋衣として紫衣を用いる習俗、ならびに年中行事の小忌衣・恋衣として紫衣を纏う習俗を基盤にし、「紫草」・「紫草の根」・「紫」というだけで恋情が絡んでいる。すなわち、紫根染めを踏まえた恋の色としての紫の光芒が周縁に放たれ、「紫草」が愛する女人、紫野にいる鹿が恋す

る男、「紫草の根」の繁茂する野の鶯が恋する女人に染め上げられ、枕詞「紫の」を冠した「粉濁の海」と「名高の浦」も恋の海辺に染め上げられている。これらの歌の発想の場は、妻訪いあるいは葉狩りにある。**在来文化と外来文化の融合** 最後に、太宰府の官人が高位高官の旅人に贈った紫の惜別の歌(④)は、以上に述べた在来の民俗の恋衣・染衣の恋歌の伝統の上に、外来文化を直に享受した貴族社会の色・服色令の色を融合させている。

まとめ 以上、当時の民俗的な紫根染めが妻訪いと年中行事の恋の場であり、その基盤から発想された恋歌が紫の歌の主流である。そして、その他はその周縁に放たれた恋の光芒としての紫の恋歌であり、これらの紫の恋歌の類型を転用した惜別の歌である。

引用文献・参照文献

青木和夫・稲岡耕二・笹山晴生・白藤禮幸『続日本紀 四』岩波書店
青木生子・井手 至・伊藤 博・清水克彦・橋本四郎 一九八二『萬葉集

四 新潮社

あかね会 一九七五『平安朝服飾百科辞典』講談社

秋本吉郎 一九六八『風土記』岩波書店

池田龜鑑 岸上慎二・秋山 虔 一九六五『枕草子 紫式部日記』岩波書店

石田譲二・清水好子 一九九八『源氏物語 一』新潮社

伊藤 博 一九八三『万葉集全注 巻第二』有斐閣

伊藤 博 一九九五『萬葉集釋注 一』集英社

伊藤 博 一九九六『萬葉集釋注 二』集英社

伊藤 博 一九九八『萬葉集釋注 八』集英社

伊原 昭 一九六五『万葉集の紫とその背景』『語文 21輯』所収 日本大

学国文学会

伊原 昭 一九八〇『日本文学色彩用語集成—上代—』笠間書院

伊原 昭 一九八六『日本文学色彩用語集成—上代—』笠間書院

上村六郎 一九八〇『上村六郎染色著作集』2 思文閣出版

上村六郎・辰巳利文 一九三〇『万葉染色考』古今書院

- 奥村恆哉 一九七八 『古今和歌集』 新潮社
 折口信夫 一九七六 『萬葉びとの生活』 『折口信夫全集 第九卷』 所収、中央公論社
 折口信夫 一九七六 『額田女王』 『折口信夫全集 第九卷』 所収、中央公論社
 折口信夫 一九七八 『民俗学上よりみた五月の節供』 『折口信夫全集 第十五卷』 所収、中央公論社
 梶川信行 二〇〇〇 『創られた万葉の歌人 額田王』 塙書房
 片桐洋一 一九九〇 『後撰和歌集』 岩波書店
 菊池威雄 一九九六 『むらさきのおえる妹 額田王』 新典社
 小島憲之・木下正俊・佐竹昭広 一九七一 『萬葉集 一』 小学館
 小島憲之・木下正俊・佐竹昭広 一九七二 『萬葉集 二』 小学館
 小島憲之・木下正俊・佐竹昭広 一九七九 『萬葉集 三』 小学館
 小島憲之・木下正俊・佐竹昭広 一九七六 『萬葉集 四』 小学館
 小町谷照彦 一九九〇 『拾遺和歌集』 岩波書店
 小村昭雲 一九六八 『原色万葉植物図鑑』 桜楓社
 阪倉篤義・大津有一・築島 裕・阿部俊子・今井源衛 一九六八 『竹取物語・伊勢物語・大和物語』 岩波書店
 坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野 晋 一九六八 『日本書紀下』 岩波書店
 桜井 満 一九九五 『万葉集の民俗学的研究』 おうふう
 桜井 満 二〇〇八 『花の民俗学』 講談社
 『新編国歌大観』 編集委員会 一九八四 『新編国歌大観 第二卷』 角川書店
 『古今和歌六帖』 所収
 『新編国歌大観』 編集委員会 一九八五 『新編国歌大観 第三卷』 角川書店
 『業平集』 所収
 関根真隆 一九七四 『奈良朝服飾の研究(本文編)』 吉川弘文堂
 高岡市万葉歴史館 二〇〇四 『色の万葉集』 笠間書院
 武井邦彦 一九七三 『日本色彩事典』 笠間書院
 多田一臣 二〇〇一 『額田王論―万葉論集―』 若草書房
 玉上琢彌 一九七六 『源氏物語評釈 第二卷』 角川書店
 土橋 寛 一九七一 『古代歌謡論』 三一書房
 土橋 寛 一九七八 『万葉開眼(下)』 日本放送出版会
 土橋 寛 一九八六 『古代歌謡をひらく』 大阪書籍
 土橋 寛・小西甚一 一九六八 『古代歌謡集』 岩波書店
 東京国立博物館 一九七三 『日本の染織』 東京国立博物館
 西宮一民 一九七九 『古事記』 新潮社
 八田亮三 一九七五 『ムラサキの自生と栽培』 『季刊 染織と生活』 第11号、染織と生活社
 前田雨城 一九七五 『日本古代の色彩と染』 河出書房新社
 前田雨城 一九八〇 『色染と色彩―ものと人間の文化史38―』 法政大学出版局
 前田雨城 一九八六 『色―染と色彩―』 法政大学出版局
 前田千寸 一九五六 『むらさきくさ』 河出書房
 前田千寸 一九八三 『復刻版日本色彩文化史』 岩波書店
 増田美子 一九九五 『古代服飾の研究―縄文から奈良時代―』 源流社
 松田 修 一九七〇 『萬葉植物新考』 社会思想社
 三品彰英 一九七四 『日本の歴史2 神話の世界』 集英社
 山本健吉・池田弥三郎 一九七九 『萬葉百話』 中央公論社
 若浜汐子 一九六五 『萬葉植物原色譜』 高陽書院
 渡瀬昌忠 一九八五 『萬葉集全注巻第七』 有斐閣
 渡辺 実 一九九六 『伊勢物語』 新潮社